
Only the piano : her friend.

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Only the piano : her friend .

【Zコード】

N4078F

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

トランペットを吹く駿平とピアノを弾く律子の二人の恋と、音楽の世界のいろんな思惑が絡み合いながら展開してゆくラヴストーリー。作者は結末を「ハーフバッドエンド」と解釈しています。

一、アプローチ

黙々とクラリネットを吹くあの娘。淡々と、練習メニューの音出し、運指、スケールをこなしてゆく。

彼女の名前は、雨宮律子。

ショートボブで、アースカラーの色の服が多い彼女。目立つ娘ではないけれど、割と美人なのだ。物静かで、休憩時間もみんなの後ろで、みんなの話を聞いているだけ。

でも、演奏はみんなに負けていない。なんたって彼女は、ファースト・クラリネットだ。彼女の性格上、主席つて訳ではない。いつも市民吹奏楽団の練習に来ると、そんな彼女のことが気になつて仕方がないのだ。

そうなんだ、僕は彼女のことが好きなんだ。

そんな僕は、戸倉駿平、トランペットを吹いている。だけど、このトランペットが曲者なんだ。三十分もすると息が苦しくて、唇が疲れてくる。ハイトーンなんか出やしない。

でも、僕はこのトランペットが好きなんだ。マイルスのCDを聞いてからは、もうメロメロ。こんな風に、トランペットを泣かせるように吹きたい。

だけど、いつまで経つても上手くならない。ファーストなんかやつたこと無いよ。だから、彼女に引き出を感じてるんだ。いつもは騒がしい僕でも、ナイーブな部分もあるのさ。

ある日の、練習の休憩時間のことだった。

僕は珍しく練習場に残つて練習していたら、彼女と一人つきりになつた。彼女は、紅い古典版のピアノ譜を見ていた。僕は近づいて、彼女に声を掛けた。

「誰の作品のピアノ譜？」

彼女は急に声を掛けられてビックリしたようで、鋭く僕を注視し

た。それから、どもりながら答えてくれた。

「モ、モーツアルトの、ピ、ピアノソナタ集」

僕は楽譜を覗き込んで言った。

「雨宮さん、ピアノも相当上手いんだね」

彼女はビックリした表情を僕に向けた。僕はことも無げに答えた。
「だって『十八番 二長調 K・五七六』を開いてるから」
彼女は更に目を丸くして、僕に聞いた。

「な、なんでそんなこと、解るの？」

僕は、はにかんで答えた。

「それは、ひ・み・つ」

僕は自分の席に戻つて、トランペットの練習を続けた。彼女はずっと僕を睨むように見つめていた。休憩が終わって合奏が始まつたが、チラチラと僕の方を見ていたようだ。

僕の中の何かが囁いた。

練習が終わつた後、思い切つて彼女に声を掛けてみた。彼女は丁度、ロビーを歩いていた。

「雨宮さん」

僕の声に彼女は振り返つて立ち止まつた。僕は急いで彼女に駆け寄つた。

「あのさ、明日、時間あるかな？ あのさ、よかつたら、ピアノのコンサートに行かない？」

彼女は僕の顔を見て僕の話を聞いていたが、僕が言い終わると彼女は下を向いて言つた。

「明日はダメなの」

そう言い終わるか終わらないかのうちに、彼女は走り去つていつた。

立ち続ける僕に、同僚のホルン吹きが声を掛けた。

「振られちゃつたのか、駿平。大丈夫、大丈夫。何とかなるって」

僕は、気のない返事をしてごまかした。

「ああ、そうだな」

僕は、彼女の走り去った方向をずっと見つめていた。

一、「うわせ

実を言つと僕は以前から知つていたのだ、「雨宮律子」という名前を。

それはピアノのコンテスト会場でだった。彼女は様々なピアノコンテストに出場し、いつも入賞しているのだった。ただ、優勝したという話は聞いたことが無かつた。

ピアノのテクニックも上々で、優しい音色で心休まる響きだったが、選曲が悪いのか、曲想を表現し切れていないのか、何かしらインパクトに欠けるのだ。

雨宮律子の父親は中堅のピアニストで、この地方では名の知れた演奏家だ。若い頃はヨーロッパで演奏していたこともあるらしいが、今はもっぱら後進の指導を中心としている。

そして雨宮律子の母親は、ヴァイオリニン奏者だ。地元のオーケストラでコンサートとして活躍する他、ソロ活動とヴァイオリニン教室を主宰している。

そんな演奏家の両親の元で英才教育された彼女に期待が集まるのは、周囲を含めて仕方のないことだ。彼女はいつもプレッシャーと戦っているのだ。

どうしてそんなことを知つているかと云うと、この僕もピアノを弾くからだ。「そこそこ出来る」と自分では思つてゐるが、師匠に言わせると「十年早いんだよ!」といつも叱られた。

そんな訳だから時々、師匠にピアノコンテストの出場を強制させられた。師匠は、僕を千尋の谷に突き落とすのだ。いつも返り討ちに遭つてボロボロになるが、一度だけ「優秀賞」をもらつて師匠の鼻を明かしたことがあつた。その時も、彼女は入賞してゐた。表彰式でずっと下を向いていた彼女の印象が、僕の中にずーっと残つていたのだ。

だが、最近の僕はもっぱら、ピアノよりもジャズトランペットに傾倒している。マイルスを知つてからはジャズにのめり込んでいる。さらに僕は、マイルスに近づくためにトランペットを始めたのだった。師匠にはまた「それこそ一十年早いんだよ」と釘を刺されている。

初めは独学でやつていたのだが、同じ師匠にピアノを習つていて、学校の吹奏楽サークルでホルンをやつてる友達が「一人でやるよりいいぞ」と、市民吹奏楽団に誘つてくれたのだ。

でも、この吹奏楽団に彼女が在籍しているとは考えもしなかつた。ましてやクラリネットを吹いているなんて全く想像すら出来なかつた。

雨宮律子は、いろいろな噂がある。

彼女には、いい意味でも悪い意味でも存在感がある。例え彼女が物静かな人物で、ひつそりとした性格であつても、音楽の世界では否応無しに、彼女のことは話題に上るのだ。

まずは、レッスンのことだ。彼女の父親は、彼女に相当な過酷なレッスンを強いているという噂だ。週に六日で、残りの一 日も父親がレッスンしているという。もちろんピアノだけでなく、聴音やコールヨーブンゲン、楽典の音楽の基礎も含まれているのだが。いつ練習してるんだ? って話だ。それでも彼女は、そのレッスンをこなしているという噂もあるから、未恐ろしい感じもするが、それだけ彼女に才能があるということなのか。

前回の練習の時に「デートに誘つたけど、振られた理由がレッスンだった。やっぱり、本当なのかもしれない、そのレッスンの過密さは。

楽団の練習の時、フルートの女達が雨宮律子のこと喋つていたのを見逃さなかつた。僕は知らん顔でそつと盗み聞きをした。

「雨宮さん、大変そうね」

「ピアノの気分転換に、つて言つてたの」「元

「初めは明るかつたのに

「でも、息抜きで吹奏楽をやられてもねー」

「今はもう、息抜きで無いそりや」

「え、どうして、どうして?」

「両親に言われたんだって」

「『ピアノか、クラリネットか、どちらなんだ』つて

「ひやー、究極の選択だわー」

「今じゃ、クラも習いに行つてるつてー」

「彼女、何か楽しみはあるのかしり?」

「さあ……」

彼女達のうわさ話をきいて、僕は思わず拳を握り締めた。

『雨宮律子が、彼女達に哀れまれる理由なんてないぞー。』

『彼女は十分に頑張てるじゃないか。お前達よりも立派だよー。』

僕は心中でそう叫んでいた。

彼女のクラリネットはホントに上手いのだ。リードミスを聴いた
ことがないのだ。

『いつ、練習してるんだ、ホントに?』

僕は、ますます彼女のことが気になつっていた。

三、約束

樂団の練習がいつものように始まった。

最初に個人での音出しとウォーミングアップが終わると、パート毎にスケールとアルペジオ、アンサンブルの練習、その後はウッドセクションとプラスセクションでの曲練習を行う。休憩を挟んで、全体の合わせ演奏というのが樂団の練習課程だつた。

雨宮律子はクラリネット、僕はトランペットだから、一緒に練習できるのは、休憩の後の全体練習しかない訳だ。全体練習の時でないと、彼女の様子は伺えないのだ。

今日の彼女の様子はいつもと変わらなかつた。ひた向きに楽譜を追い、指揮者の指示をメモし、演奏に没頭していた。顔を上げるのは、指揮者を見る時、指揮者の指示を聞く時だけ、あとは前下がりのボブカットが彼女の顔を隠して、表情がよく読み取れなかつた。

僕はやっぱり気になつていた、雨宮律子のことが。無駄かもしれない。無理かもしれない。だけど、もう一度だけ彼女に声を掛けてみようと思った。それは義務感なんかではなかつた。僕の素直な気持ちだつた。

樂団の練習が終わると直ぐに僕は慌てて楽器を片付けて、彼女の姿を追つた。そして、ロビーのところで彼女に声を掛けた。前回と同じように。

「雨宮さん、待つてよ

僕の声に、足早に歩いていた彼女はすつと立ち止まつた。そして振り返つて僕の方を見据えて言つた。

「何か、用ですか？」

彼女は、練習の時と同じように、前下がりのボブカットが彼女の表情を隠していたが、その返事の声の低さや抑揚のぶつきら棒な感じで彼女の気持ちが伝わってきた。『私に関係しないで』と言わん

ばかりの雰囲気だった。

そんな彼女の態度に、僕はたじろいだ。だが、後には引けなかつた。僕は声を掛けようと思った時の気持ちを思い起こして、声を振り絞った。

「え、えっと、今日はこれから暇かな？」

彼女は、相変わらず下を向いていた。そしてそのまま微動だもせずこう言つた。

「時間なんて……空いてないわ」

僕は、その答えは予想済みだった。だけどその答えに対抗する手段を持つていなかつた。だから、なおも食い下がる以外に方法がなかつた。

「それじゃあ、いつなら空いてる……かな？」

彼女は何かを考えている風ではなくて、全てを受け入れる余裕がないといつた感じだつた。全く顔を上げずに、諦め切つた、力ない小さな声で答えた。

「空いてる時間なんて……」

僕は、聞き取れない小さな声になつてゐる雨宮律子に少し苛立つた。後から考えたら『どうしてこんなことを言つたのだろう』と思つたのだが、それでも彼女のことについて、気に障らないように恐る恐る訊いた。

「それって、レッスンだから？」

『レッスン』という言葉に彼女は異常な反応を見せた。突然僕の方を向いたかと思うと、大きく目を見開き、口を尖がらせて、彼女の声としては聴いたことのないような大きな声を発した。

「そうよー！」

そして、カバンと楽器ケースをキュッと握り直して、玄関の自動ドアへ走り出そうとした彼女の腕を、僕はまるで条件反射のように、とっさにグイッと掴ました。

彼女は、腕をつかまれた拍子に走り出そうとした身体が制止され、髪の毛と体勢が崩れた。そして、彼女は乱れたれた髪のまま、僕を

睨みつけた。

僕は、自分が思わず行動してしまったことと、その行動 자체が大膽だったことに自分自身が驚いていた。そして、ほんの一瞬のパンツクが過ぎ去り、自分が彼女の手をつかんでいることを認識した時、僕はゆっくりと脱力しながら彼女の腕を離して静かに言った。

「乱暴にしてごめん。そんなつもりじゃないんだ。僕は君のピアノが聴きたいだけなんだ」

僕が喋り終わるまで、彼女はずーっと僕を睨みつけていた。それは数秒間、そのまま続いた。

その数秒後、彼女はやっと僕の言葉を理解したようだった。急に彼女の鋭い厳しい表情が崩れ、身体の力が抜けた。そして、僕の言葉に対して彼女の感想めいたものが、嗚咽のような言葉で漏れてきた。

「え！？」

信じられないという表情と、不思議に優しい表情が、彼女の顔に入り混じっていた。僕が今までには見たことのない彼女の顔、彼女の表情だった。

僕は、出来るだけ静かに、優しく、祈るように、懇願するように言った。

「君のピアノが聴きたいんだ」

だが、その言葉は逆効果だったようだ。その言葉を聞いた彼女は、その言葉が頭の中のいろいろなところを駆け巡って、悲しい思い、嫌な思いを通過したのだろう、また表情を暗く、悲しく、冷たく、硬くした。だが、今度は下を向かずに真っ直ぐに僕の顔を見て、振り絞るように彼女はこう言つた。

「ごめんなさい」

彼女はそう言つて、下を向いてカバンと楽器ケースを持ち直して、玄関の自動ドアに向つて走り去つた。

僕は、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけだけど、何かを感じ取つた。だから、僕は最後の望みを掛けて、彼女の後姿に向つて大声

で言つた。

「来週はいいよねつ？」

間髪を居れずに、僕はもう一聲掛けた。それは念を押すようつこと。

「約束だよ！」

彼女は一瞬立ち止まつたが、足早に自動ドアの向こうに消えていった。

つた。

僕は、彼女が出口で左に曲がつて見えなくなるまで、立ち廻りしていった。見えなくなつた途端に気が抜けて、肩を落とした。

四、デート

「来週はいいよね？」

「約束だよ！」

前回の楽団の練習の後、雨宮律子が去つて行く後姿にこう言い切つたものの、僕自身には全く自信がなかつた。そして、正直言つて彼女がどんな反応をしてくるか、期待することが出来なかつた。だけど、淡い希望だけは捨て切れなかつた。なぜなら、一瞬だが僕に見せたあの優しい表情が嘘でないよう思えてならなかつたらだ。それに、僕が彼女に恋しているから、可能性が全く無いに等しくてもそう思いたかった。

「彼女に迷惑だつたかな」

楽団の練習を明日に控えて、僕はベッドの中で弱気なことを考えてしまつた。

翌日、楽団の練習はおかしな雰囲気が漂つていた。僕は平静を装い、彼女もいつも通りの感じだつたが、周りがそうではなかつた。特に、全体練習が始まつてからは氣不味い雰囲気だつた。

どうやら、前回の玄関ホールでの僕と雨宮律子のやり取りが、楽団全体にうわさとして広まつていたようだつた。だから、楽団員はまるでテニスの試合のラリーのように、僕と彼女を交互に見て様子をうかがつっていた。

全体練習に入る前の休憩時間、ウーロン茶をすすつていた僕にホルン吹きの奴が訊いてきた。

「おい、どうなつたんだ？」

僕は知らんふりして答えをした。

「何が？」

ホルンの奴は苦み走つた顔をして言つた。

「とほけんなよ！ 雨宮さんのことだよ」

僕はウーロン茶をすすつて答えないでいた。

その様子にシビレを切らしたホルン吹きは嫌味を言った。

「じれつたい奴だな」

そして、ホルン吹きは单刀直入に訊いてきた。

「ははん、フЛАレたんだな？」

何も答えない僕に、ホルン吹きはしたり顔でこう言つた。

「そうだろ。やっぱり、図星なんだな」

そう言つて、ホルン吹きは僕の所を去つていった。

僕は、周りに聞こえない程の小声で呟いた。

「そんなこと、ない、……はずさ」

だが、それは僕の淡い希望であつて、現実とはかけ離れているだ
うといふ予想が、僕の心の中を支配していた。

練習が終わつて、僕は周りの様子を知りたくないといった感じで
下を向き、そそくさとトランペットを片付けた。

重々しい足取りでロビーに降りてきたところで、僕はビックリし
た。ロビーの待合の椅子に、雨宮律子が座つていたのだ。

僕は信じられなかつた。まさかと思った。だが、彼女がここに座
つて待つてゐるのは、僕を待つてゐるとしか考えられないといふ思
いが、僕の心の中では確信となつて表れてきた。

僕は思わず足早に彼女に駆け寄り、彼女の背中から声を掛けた。

「雨宮さん、どうしたの？」

僕の声に、彼女は振り返つた。彼女は声を掛けたのが僕だと認識
すると、前下がりのボブカットの髪を搔き分けて、いかにも慣れて
いない風の、ぎこちない笑顔を僕に向けてくれた。そして小さな、
愛らしい声でそつと呟いた。

「……約束は、守らなきや」

彼女は直ぐに下を向いた。ボブカットが邪魔して彼女の表情が読
み取れなかつた。

僕は、急に口元が緩んだ。

「ありがとう」

僕は立て続けに言葉を発した。

「今から、時間あるかな？ レッスンとかは大丈夫かい？」

僕の捲くし立てるような話し方に彼女は戸惑い、彼女の笑みはますます引きつっていった。

彼女は落ち着いてから、ゆっくりと言葉を発した。

「今週は五週目だから、レッスンは無いの」

それを聞いた僕は、彼女の手を引いて立ち上がりさせた。

「それじゃあ、行こう！」

彼女は、びくびくした表情で僕に尋ねた。

「え？ ど、どこへ行くの？」

僕は、飛び切りの笑顔を彼女に向けて言った。

「音楽が楽しめるところさ」

僕は、彼女の手をとつて自動ドアを出た。

五、ライブハウス

「どこへ行くの？」
びぐびくした表情で僕に尋ねる彼女に、僕は飛び切りの笑顔を彼女に向けて言った。

「音楽が楽しめるところを」

辿り着いたのは、僕の行きつけのライブハウス。店のドアを開けると音楽は鳴っていたが、演奏してる雰囲気ではなかつた。
ウイークディだからといってライブ演奏がない訳ではないのだが、
今日の曜日は比較的演奏がない日なのだ。

店の奥へ行くと、マスターが声を掛けてきた。

「よお、駿平。いらっしゃい」

マスターは苦虫を噛み潰したような顔をして僕に言った。
「ちょっとピアノを弾いてくれよ。生音がしないライブハウスは、
格好がつかん」

僕は、にやりと笑つてうなづいた。

マスターは、僕の後ろにいる律子を見逃さなかつた。

「駿平！ 女連れじゃねーか！」

そう言つと、マスターは僕には見せたことのない笑顔で律子に声を掛けた。

「いらっしゃいませ、お嬢さん。ちょっと汚い所だけど、良い音を聴かせるよ。音響はバツチリだよ。ゆっくりしていってね～」

マスターは律子に手を振つた。

律子は、相変わらず引きついた笑みで答えた。

「あ、ありがとうございます」

マスターは、僕に向き直つて言った。

「この娘が、いつも話に出てくる……」

僕は、慌ててマスターの言葉を遮るよつて言つた。

「ピアノに近い席、座るよ

マスターは、指でOKサインを作つてから言つた。

「ピアノ、頼む」

僕は、マスターにグッジョブサインを送つた。そして、ピアノに一番近い丸テーブルに律子と向き合つて席に着いた。

「雨富さんはこんな所、来たこと無いよね」

律子は、見回してから僕の言葉に答えた。

「ええ、初めて」

僕は、ワクワクしながら律子に語り掛けた。

「面白いぞ。ここにはいろんな音楽があるぜ。ジャズやフュージョ

ン、ロック

僕は身を乗り出して律子に聞いた。

「雨富さんは、クラシックばかりなの？」

律子は、少しムツとした。

「聴くのはいろいろ聴くわ」

そして、ちょっと目を伏せた。

「でも、演奏するのはクラシックだけ」

マスターが来て、コーラとオレンジジュースを置いた。

「お熱いお一人さんにどうぞ。ちなみに、これは俺の奢り。だから、早くピアノを弾いてくれよ」

僕は、マスターに促されてピアノの前に座つた。マスターは、Dノブースに入つて口を止めた。そして、僕は静かにピアノを弾き始めた。

一曲目は、スローテンポの「枯葉」を独特の哀愁をジャズ風のイントネーションで弾いた。

続いての二曲目は、スタンダードの「八十日間世界一周」を中庸なリズムの中に、緩急を付けて演奏した。

そして三曲目は、軽快なリズムの「A列車で行こう」だ。この曲はマスターのお気に入りだ。マスター自ら、ジェットブラックのサインントコントラバスで弾いてくれた。

僕は席に戻つて、律子に感想を聞いた。

「どうだつた？」

律子の顔には、自然な笑みがあふれていた。

「うん、とつてもいい感じ。自然に、身体がリズムを取つてゐるの」
そして一旦、マスターの姿を見てからこう言つた。

「マスターのベース、素敵ね」

律子の目は輝いていた。僕はもう一度、律子に訊いた。

「楽しい？」

律子は即答した。

「ええ、とつても」

僕は思い切つて、律子に言つた。

「君もどう？」

律子はキョトンとしていた。

「え？」

僕は説明するよつに言つた。

「ピアノ、弾いてみない？」

六、ピアノ演奏

「ピアノ、弾いてみない？」

僕は思い切つて、律子に言った。

本当は、前々から考えていたことだった。コンテストなどのホールじゃない所で弾く、律子のピアノが聴きたかったのだ。

律子は、驚いてたじろいだ。

「私、ジャズなんて出来ないわ」

僕は、律子に優しく言った。

「ジャズにこだわらなくてもいいよ」

「えー、でもー」

律子がモジモジしていると、その後ろからマスターが割り込んできた。

「聞いてますよ、お嬢さんはピアノが上手いって。うちの店は、音楽のジャンルを問いませんから、是非、弾いてくださいよ」

僕は、彼女の弾く曲を前から考えていた。だけど、今思いついたように律子に言った。

「そうだ！」アイネ・クライネ・ナハトムジークはどう？　これならクラシックでOKだよ

律子はしばらく考えていたが、すぐっと立ち上がった。

「じゃあ、弾いてみる」

そう言って、ピアノに向った。

彼女は椅子を調整して一瞬宙を見てから鍵盤に向かい、そして弾き始めた。

コンクールで聴いた律子のピアノとは違っていた。弾むように、そして持ち味の優しい音色が響き、心なしかフレーズがジャズ風になっていて、実に生き生きとした律子のピアノだった。

弾き終えて立ち上がった律子に、店の中から拍手が沸き起こった。

律子は、深々とお辞儀をして席に戻ってきた。

僕は、拍手で律子を迎えた。

「ブラボー、よかつたよ」

律子は手のひらを左右に振りながら、恥ずかしそうに言った。

「ミスタッチばっかりよ

僕は「一ラをすすりながら、律子に訊いた。

「でも、気持ちよかつたでしょ？」

律子は、僕に向って満面の笑みを浮かべて、静かに、でも大きくうなずいた。

律子が時間を気にし始めたので、僕は店を出ることにした。

「もう、お帰りか」

マスターが声を掛けってきた。

「うん、彼女の門限がね」

僕はちょっと照れながら答えた。

「そうか。モテる男はつらいなー」

マスターは僕にそう言い、律子にも声を掛けた。

「お嬢さんのピアノ、よかつたー。演奏をありがとう。是非また来てよね」

律子は恐縮して言った。

「ハイ、ありがとうございます」

僕と律子は席を立つた。

「じゃ、駿平。またな」

そう言ってマスターは、店の入り口まで送ってくれた。

僕と律子は、一緒に歩き始めた。僕は歩きながら正面を見たまま

言った。

「今日はありがとうございました。強引な約束を守ってくれて

律子も正面を向いたまま、僕の言葉に応えた。

「ちょうどよかつたの」

僕は律子の方を向いた。

「何がよかつたって？」

律子は夜空を見上げながら言つた。

「何でもない」

そして僕の方を見て言つた。

「今日は楽しかったわ。ありがとう」

そう言い終わると、律子は駆け出した。しばらく走つてから、振り返つた。

「またねー」

そう言つと、律子は再び振り返つて走り去つていった。僕にさよならを言つ暇を与えなかつた。

僕は、ずい分小さくなつた律子の姿に手を振つた。そして、大声でこう叫んでいた。

「またなー」

そして、僕はつぶやいた。

「『また今度』って、次の五週目はいつなんだ?」

七、海のデート

僕と律子は、吹奏楽団の練習の後、いつも一緒にライブハウスに行つた。それが、僕と律子の“デートの定番”だった。

うわさ通り、律子のレッスンスケジュールは一週間を通してビックリだった。だから、精々それくらいの時間しか、律子の都合が付かなかつたのだ。

いつも、僕と律子のつながりは音楽だった。ライブハウスで演奏して、時には律子との連弾をしたりした。マスターとのおしゃべりも楽しかつた。音楽談義に花が咲いた。

それだけでも十分に満足だつたけれど、でも、それだけじゃ、何か物足りない……。

ある日曜日の朝、律子から電話が掛かつてきた。

「今日はいい天気ね」

「うん、そうだね」

「暑くなりそうかな？」

「たぶん」

「日焼けしちゃうくらいい？」

「昼から雷だつて予報だよ

「えー、雷なの？」

「律子は雷、ダメなんだ」

「そう、怖いよ」

僕は、要領を得ない律子の喋りが気になつた。そして僕はあることに気が付いて、律子に語りかけた。

「ねえ、律子。もしかして今日は一日、空いてる？」
しばらくの沈黙の後、律子は小さな声で行つた。

「……うん」

僕は、一やりとしながら携帯電話を右から左へ持ち替えた。

「じゃ、これから海に行こうよ」

律子は、動搖していた。しかしそれが嫌な動搖ではないことは律子の声から分かった。

「え、急にそんなこと、言わわれても……」

「僕は、尚も食い下がつた。

「海に行くだけだよ。泳ぐ訳じゃないんだし」

いつもなら答えるのに時間の掛かるのだが、今日の律子は答えるまでが早かつた。

「分かつたわ。行くわ」

僕は、待ち合わせの時間と場所を告げて、電話を切つた。

僕が待ち合わせ場所である、駅のロータリーに着いたのは、待ち合わせ時間を五分過ぎていた。律子は既にロータリーで待っていた。律子は、僕を見つけると手を振りながら走り寄つてきた。

「ごめんね、遅くなっちゃって」

僕は、遅ってきた非を詫びた。律子は笑顔で答えてくれた。

「大丈夫よ、私も今来たところだから」

水色のフレアスカートに、白いノースリーブのキャミソールの上にレースのボレロを羽織つたその腕は、日焼けで少し赤くなつていた。

僕と律子は、電車に乗つて海へ出掛けた。

「律子と音楽の絡みなしでデートするのは初めてだね」

僕がそう言うと、律子は照れた。

「私、こんな風に男の人とどこかへ行くのは初めてかも」

僕はちょっとビックリした。

「えー、そうなんだ。いつものライブハウスは？ あれは違う？」

「だつて、あれは、あの、その……」

律子は顔を真つ赤にして、シドロモドロだった。

「ごめん、ごめん。いじめる訳じゃないんだよ」

僕は律子を困惑から助け出そうとした。

「律子は純粋なんだなーって、そう思つたのさ」「律子はブイと横を向いて知らん顔をしていた。

駅から海岸までは、少し距離があった。僕と律子は、お土産屋をチラリチラリと覗きながら、海岸までの道を急いだ。

白い砂浜と、青い海が、そこに開けていた。

律子は日に焼けないようだと、お土産屋で買った可愛い花の付いた麦藁帽子をかぶつて、砂浜を駆け出した。僕は、律子の後を追つて走り出した。

風で麦藁帽子が飛ばされそうになつて、頭を押さえて立ち止まつた律子に、僕は律子の後ろから腰に手を回して、律子を抱きしめた。

「つーかまえた」

僕が無邪氣そうにそう言つと、律子は恥ずかしそうにした。

「いやん、止めて」

律子にそう言われた瞬間に、僕も急に律子を意識した。そして、律子を抱きしめていた手を緩めた。

「あ、ごめん」

二人は急に照れ始めた。

でも、僕は一旦緩めた手を、もう一度律子の腰に回して抱きしめた。そして、僕は呟いた。

「好きだよ、律子」

そういうた途端に、律子の強張らせていた身体の力が抜け、僕の腕に手を重ねた。そして小さな声で律子は呟いた。

「私も、好き」

しばらく、僕と律子はそのままでいた。

やがて、律子がうめき声を上げた。

「駿平、苦しい。息ができないわ

知らないうちに、律子を抱きしめる僕の腕の力が強くなつていたようだつた。

「あ、ごめん」

僕は慌てて、自分の手を解いた。

律子は、ほつと溜息をついて僕の顔を見た。

「もう、ビックリしちゃった。死ぬかと思ったわ」

そう言いながら、律子の顔から笑顔が絶えなかつた。そして、律子は僕の首筋に抱き付いてきた。

そして、僕の頬に軽くキスをした。

「嬉しいわ」

そう言うと、律子は手を振り解いて、また浜辺を走り出した。走り出す律子を見ながらキスされた頬に手を当ててボーッとしていたが、ふと我に返つて、僕はまた、律子の後を追つた。

「待てよー」

僕がそう言いながら追い掛けると、律子は笑いながら僕に言った。

「駿平、いつも一緒に居てね」

僕は、大きくなづいた。

八、レッスン

「いい音だね、律子」

雨富律子はレッスン室でピアノを練習をしていた。そこへ父親が入ってきて、一言漏らした。律子は、チラッと父親を見たが、そのままピアノを弾き続けた。

『シュー・ベルト即興曲OP.九〇-三』

弾き終えた律子は、ゆつくりと父親の顔を見た。父親は、満足そうに律子の顔を覗き込んだ。

父親の雨富健一は、中堅のピアニストで、この地方では名の知れた演奏家だ。若い頃はヨーロッパで演奏していたことがあるが、その頃の無理がたたつて身体を悪くし、今はもっぱら後進の指導を中心としている。

ヨーロッパから帰国した本人の弁は、「やつぱり醤油が恋しくて帰つてきちゃつたよ」というものだつた。

「恋を、してるね」

健一はピアノの黒い表面を撫でながら、そう言った。しかし、彼の目は律子から離れなかつた。

彼女は鍵盤を見たまま、何も言わなかつた。だが、少しだけ頬を赤くしてしまつた。

「そなんだね」

健一は楽譜を見ながら、更に付け加えた。

「『ダメだ』とは言わない」

律子は顔を上げて、父親の顔を見た。だが、健一の視線は楽譜に注がれていた。

「だが、節度がないといけないよ」

そう言い終わると、楽譜を指し示して、律子のピアノの指導を始めた。

一時間後に律子のレッスンが終わった。

楽譜を片付ける律子に向って、健一は大胆な発言をした。

「今度の休みに連れて来なさい」

律子は驚いた。父親がそんな発言をするなんて、想像すら出来なかつたのだ。だが、その後の、父親の言葉を聞いた後は、何とも言えない気分になつた。

「私が吟味しようじゃないか」

健一はそう言ってレッスン室を出て行つた。

次の楽団の練習日、練習室に入つてきた戸倉駿平を呼び止めた律子は、小さな声で呟いた。

「え？」

駿平は、思わず聞き返してしまつた。律子の言葉がすぐに理解できなかつた。

「今度の日曜日こ、家に来ない？」

律子がそう言つたように聞こえた。でも、確信がなかつた。

「ど、ど、ど、じうゆうこと？」

ポカんとしている駿平に、律子はじれつたそつに同じことを繰り返した。

「だから…」

律子は大きく声を張り上げた。

「今度の日曜日に家に来てつて言つてるの！」

僕はのぼせ上がつた。それと同時に、律子の家庭環境が思い浮かんで、冷や水を浴びせられたような冷静さも忘れなかつた。

この頃の、僕と律子はずい分仲良くなつていた。すぐに五週目ずつのデートではなくなり、市民吹奏楽団の練習が終わつた後には必ず、いつものライブハウスで、デートを重ねていた。

律子の大きな声に、楽団員が振り向いた。そして駿平と律子を冷やかした。

「おいおい、大きな声でデートの約束かあ！」

「ヒュー、ヒュー、お熱いお一人さんね」

その声に、律子は顔を真っ赤にして部屋を出て行った。僕も律子を追つて部屋を出た。

部屋を出たところで、律子は立っていた。僕は律子にぶつかりそうになつた。

「もう！ 駿平つたら…」

律子は口を尖らせながら、手の甲をつねつた。

「イテテテ、ごめん、ごめん」

僕は痛がりながら、謝つた。

「ちょっと信じられなくてや」

そして、僕は間髪入れずにこう言つた。

「今度の日曜日だね。空けとくよ。必ず行くから！」

僕がそう言つと、律子はニッコリ微笑んだ。だけど、すぐに普通の顔に戻つた。

僕の「冷や水を浴びせられたような冷静さ」と同じことを考えているのだろう。

律子はゆっくりと喋り始めた。

「あのね……」

九、訪問

「あのね……」

律子はゆっくりと喋り始めた。あんまり浮かない顔をしながら。「父が、連れて来いつて

僕の想像通りだつた。

噂通りのレッスンを律子にさせている、あの有名な「雨宮健一」だ。そんなことを言いそなのは想像に難くなかった。

僕は努めて明るく言った。

「そつか。そなんだ。でもさ、大丈夫さ」
僕はかぶりを振つた。

「とりあえずは『友達』つてことで、うん」

律子の表情に少しだけ赤味が戻つて、口元にほんの少し、笑みが浮かんだ。でも、律子の目は笑つてなかつた。

「父は『恋をしてる』つて言つてた」

僕は雨宮健一の眼力に驚いた。さすがはプロだ。律子の弾くピアノの音にまで敏感なんだ。

僕は「ハアー」と溜息を吐いてから、律子の手を取り、彼女の目を見つめて言った。

「変なごまかしは、しない方がいいようだね。僕と律子はいつも通りだよ、うん。それで行こうよ」

僕がそう言つと、ようやく律子の目が優しくなつた。そして、小さくうなづいた。

「うん、そうね」

日曜日の午後、僕は律子の家の呼び鈴を押した。

律子の家は、さすがに大きい。両親が伊達にプロを名乗つてている訳ではない。レッスン室が三つはあるという噂だ。

律子が玄関を開けて、迎え入れてくれた。

「どうぞ。中に入つて」

律子に言われて玄関をくぐつた。そこには、彼女の母親「雨宮奈津子」が立つていた。

「駿平クン、どうぞ」

母親の奈津子にそう声を掛けられた僕は、いきなりビビッた。
(あちやー。名前まで知れているぞつ)

雨宮奈津子は、ヴァイオリン奏者だ。地元のオーケストラでコンミスとして活躍する他に、ソロ活動とヴァイオリン教室を主宰している。

玄関を上がって、応接間に通された。

ナチュラルのフローリングに、白い壁、白いソファセットがガラスのテーブルを挟んで置いてあった。
まんじりともせず、ソファに座つた。

僕は全然落ち着かなかつた。

しばらくすると、律子と母親がお茶を持ってきた。母親は、紅茶を出しながら律子に言った。

「律子、駿クンの隣に座りなさい」

母親の言葉に、またまた僕はビビッた。

(駿クン……つて、いきなり砕けてるよ~)

「はい、お母さん」

律子は平然として、三人掛けソファに座る僕の横にちよこんと座つた。

母親は、紅茶を出し終わると、三人掛けソファの反対に置かれた、一つ並んだ一人掛けのソファに深々と腰掛けた。そして流暢に話し始めた。

「ごめんなさいね。主人、午前中には帰る予定なのに遅れてるのよ
母親の奈津子は溜息をついた。

「結局、私に押し付けなのよね」

そう言って母親は、紅茶をすすつた。

「駿クン、あなたのこととは娘から聞いていますわ。私たち、仲の良

い母娘なんですね」

母親はまた、紅茶をすすつた。

「駿クンとお付き合いを始めてから音が変わったわね」「母親の奈津子は、律子の顔を覗き込むように言った。

「いい音になつたわ」

そして、遠くを見る田でさわやいた。

「恋つていいわね」

母親は、紅茶のカップ＆ソーサーを置いた。

「あ、そうね。駿クンもピアノ弾くのよね」

そう言いながら母親は僕を見た。

「是非、聴きたいわあ。聴かしてくれないかしら?」

僕は、最初から圧倒されまくつていた。僕の想像していたイメージとは、全然違つていた。「こんなに碎けていいのか?」と、僕は自問した。

気が付くと、律子が母親に意見していた。

「ダメよ。今日は緊張してるんだから! それに、そんなつもりで駿平クンは来てないし」

母親も負けてなかつた。

「あ～ら、いいじゃないの。あの人、どうせ今日は帰らないわよ」「父親の悪態をつきながら、律子を諭していた。

「あの人の方が緊張しているんだわ、きっと」

母親はじれつたさに我慢しきれず、席を立つて、僕を手招きした。

「さあ、レッスン室へ行きましょ

母親は律子の腕を引っ張つた。

「ほら、律子も立て!」

律子は呆れ顔で言つた。

「お母さんは、言い出したらきかないんだから」

そう言つてから僕に向き直つた。

「ごめんな。お母さんの言つ通り、お父さんが居ないの

律子は申し訳なさそうに僕に頼んだ。

「悪いけど、今日はお母さんに付き合つて」

僕は、肩透かしを食らつたようだ。だけど、僕も少しリラックスできそうだった。僕は、母親に向き直つて言った。

「はい、分かりました。少しだけ、ボロが出ない程度に「母親は嬉々として言った。

「じゃ、レッスン室にレッツゴーよ！」

母親はドアを開けて廊下に消えていった。

僕と律子は、顔を見合わせてブツと吹いた。

「セツションド」

「ええ、セツションドよ」

僕と律子も廊下に消えていった。

十、アンサンブル

「じゃあ、律子はクラリネットね」

母親の奈津子は、モタモタしている律子を見て言った。

「早く、用意しなさい」

遅れてレッスン室に入った途端、母親の奈津子は娘の律子にそう言ふと、自分はヴァイオリンを構えた。

大きなレッスン室だった。防音の効いた部屋に置かれた、フルサインのコンサートピアノが、小さく見える程広い部屋だった。少人数の室内管弦楽なら練習出来るように作られた部屋のようだった。

「駿クンは、ピアノね。三人で、アンサンブルをするわよ。初見くらいは大丈夫よね?」

母親は早口でそう言つて、僕に譜面を渡した。

譜面は手書きで書かれていた。どうやら、オジリナルのようだ。タイトルを見てビックリした。

『奈津子と律子と駿平のアンサンブル』

僕はまたまたビビッりまくつた。今日の、このために作曲されたものなのだ。しかも、作曲者は「兩宮健一」と署名されている。律子の父親だ。もう、驚くしかなかった。

律子は、父親との関係はどうなのか解からないが、少なくともこの母親とは実に密な意思の疎通が出来てているのは、明白だった。

「さあや、ピアノの前に座つて、弾いてみて」

母親の奈津子は、ヴァイオリンを構えたまま、僕がピアを弾くのをワクワクしている様子だった。

僕は楽譜を譜面台に載せて、椅子に座つて調整し、指を鍵盤に置いた。

「ポロン、ポロポロ、……」

僕は、譜面を見ながら弾き始めた。所々に難しい運指があつて多少つまづきながらも、それでも何とか弾けるレベルの曲だった。

多少、細工してゐるな、という部分は見抜いた。……つていうが、それ位は想像がついたけれど。

律子は、僕のピアノのレベルを、実に的確に、父親と母親に伝えていたのだ。

僕がピアノを弾き続けていると、ヴァイオリンの音が聞こえてきた。母親の奈津子が、待ち切れない様子でヴァイオリンを弾き始めたのだ。

律子はそそくさとクラリネットを組み立てて、音出しを始めた。その様子を見て母親は、ヴァイオリンを止めて、律子に言つた。
「律子はさつき、練習したからいいじゃない。せつせと呟わせるわよ」

そう言つて、母親は律子を呼んだ。

律子は普ッと脹れて言つた。

「私はいいけど、駿平クンには時間をあげて。初めての楽譜なんだし。お父さん、意地悪してるし」

母親は律子の言葉を無視して言つた。

「大丈夫よ。駿クンが弾くのを聞いたけど、全然、問題ないわよ」
それからすぐに、母親は僕の方を向いた。

「そうよね？」

僕は楽譜から田を離さず、弾き続けながら答えた。

「ええ、大丈夫です」

母親は得意そうに言つた。

「ほーらね、り、つ、こ」

母親の奈津子はヴァイオリンを構えた。

「じゃ、いくわよ。ワン、ツー、ハイ」

母親の合図で、合奏に入った。

初めての一回田は、どうしてもつまづいてしまつたが、二回田は、何とか弾き通した。

「じゃ、アーティキュレーションをシッカリとね」

母親はそう言つと、また合奏を始めた。

合奏開始から一時間近くが過ぎていた。

「じゃあ、休憩しましょう」

母親はそう言うと、レッスン室から出て行った。

僕は少々ばてて、クタクタだった。レッスンでもライブハウスでもこんなに長時間、ピアノを弾いたことがなかった。僕は、近くにあつたソファにびっかりと腰を下ろした。

「大丈夫？」

律子は、くたばつてソファに座っている僕を心配して、声を掛けてくれた。僕の肩に置いた律子の手を、僕は握り締めて言った。

「ああ、大丈夫さ」

律子は自分の手を握り締められていることに気付いていなかつたが、紅茶とクッキーをトレイに載せて入ってきた母親は、すぐに気が付いたようだつた。

「あらあら、お熱いお二人さんね」

律子は、赤くなつて手を引っ込めた。僕は、視線を母親から外した。

「いいわよ、別に。照れなくとも」

テーブルに、紅茶とクッキーを置きながら、母親は溜息をついた。

「私だつてそんな時期があつたわ」

母親は、思い出を探るように遠くを見るような目をした。

「あの人にお会い、もつと前のことだけね」

言い終わるとさつときまでの表情に戻つて、紅茶のポットに目を落とした。

「さ、お茶にしましょ」

僕と律子は、レッスン室の端にある、テーブルの席に着いた。

紅茶を飲みながら、母親の奈津子はブツブツと独り言を言った。

「律子から聞いていたレベルより少し上ね。なかなかいいわよ、駿
クン」

奈津子は、僕と律子に構わず喋りまくつた。

「でもね、何が引っ掛かるのよ。駿クンの弾き方、何処かで聴いたよつな……」

奈津子は、額に手を当て、しかめっ面で考え込んでいた。

「思ひ出せないわ

僕と律子は顔を見合せた。

「あ、いいのよ。私の独り言だから

母親はそう言つて、紅茶をすすつた。

「今日は楽しかつたわ」

僕が玄関で靴を履いている時に、母親の奈津子は満足そうに言つた。

「お母さんが言つことじやないでしょー。」

律子はまた、普ッと怒つた。

「また来てね。セッションしましょー」

母親の奈津子は懲りずに僕に話し掛けた。

「んもう、お母さんつたら！」

律子はホントに悔しそうだった。

律子が近くの駅まで送つてくれた。

「今日はごめんね。お母さん、張り切り過ぎちゃつて」

律子がそう言つと、僕はニヤリと笑つて言つた。

「そんなこと無いよ、楽しかつたよ。お母さんとセッションが出来てさ」

僕は横田でチラリと律子を見た。

「お母さんのこと、よく分かつたし。律子の家庭が、よーく分かつたしね」

律子はちょっと照れた。

「ここでいいよ、送つてくれてありがとう。またな、楽団の練習で僕は、そう言つて律子に手を振つた。名残惜しそうに、律子も手を振つた。

「うん、またね」

律子の、はにかんだ笑顔が可愛かつた。

「駿平、もう一回だ」

僕は「ベートーベン・ピアノソナタ五番・第一楽章」を、もう一度弾いた。

照明のトーンが少し落ちた、コンクリート打ちっ放しの壁で、グレーの分厚いカーペットが敷かれた床に、フルサイズのコンサートピアノが置かれた部屋で、僕、戸倉駿平は、ピアノのレッスンを受けていた。

「もう一回だ。もう一回弾いてみる」

繰り返し演奏を指示するのは、師匠である「藤巻要一」であった。師匠は、ピアノから少し離れたところで、椅子に座り、腕を組んで、タバコをくわえていた。

「えーっ！ 何回弾けばいいんです！？」

僕はつい、そう愚痴をこぼしてしまった。

師匠は、くゆらせたタバコを灰皿でもみ消して、ピアノに近づいてきた。

「いいから、弾くんだ！」

師匠は、先程より強い口調で言つた。僕は仕方なく、もう一度弾き始めた。

どうしてなのだろうか。

師匠の機嫌がいつのまにか悪くなつた。

レッスンが始まつた時は、こんな風ではなかつた。いつもの調子で、師匠は僕に声を掛けてきた。

「駿平、元気だつたか！」

「今日も下手くそなピアノを聴かせるつもりか？」

「たまにはちゃんと聴かせてくれよ」

そんな冗談からレッスンが始まつたのだが、僕が弾き始めたと同

時に、師匠の眉間に深い溝が刻まれ、タバコを急に吹かし始めたのだった。

そして「もう一回弾け」のセリフが出たのだ。

僕が三回目のソナタを弾き終えた時、師匠はピアノの端に両手をついて、下を向いて考え込んでいた。そして、こちらに僕の方に顔を向けた。

「お前、最近、誰かにピアノ教わったか？」

僕は身に覚えが無かった。当然、答えは「ノー」だった。

師匠はまた、突つ伏して考え込んだ。そして前と同じように僕の顔を見た。

「誰かの作品を弾いたか？」

この質問には「イエス」と答えた。ジャズやポピュラーをライブハウスで弾いていたからだ。

「いや、違う！」

師匠の言葉は鋭く、そして師匠の顔は厳しかった。

「そうじゃない……。そう、ピアノで何かを弾いたことはないか？」

「それもクラシック系の現代音楽だ」

僕は必死で考え、思い出そうとしていた。

「うん……」

ほとんど諦めかけた時に、僕はハツと気が付いた。

「あ！ 律子の家があ！」

師匠は突つ伏して考えていた姿勢から、素早く僕を見返した。

「律子？！ 律子って、雨宮律子のことか！」

師匠の大声に僕は驚き、ビビッた。

「雨宮の家に行つたのか？！ そこで何をしたのだー？」

師匠は捲くし立てるように僕に質問した。

「えーっと、律子の家に呼ばれて。お袋さんと律子と僕とアンサンブルを」

師匠は、そう答える僕の顔を覗き込み、食い入るように僕の言葉を聴いていた。

「親父さんが作曲した、三人のためのアンサンブルの曲、でしたけど」

僕は、師匠の迫力にオドオドしながら答えた。

「お前は何を演奏したんだ？ ピアノか？ トランペットか？ どちらなんだ？」

師匠はさらに迫つてきた。

「え、あの、その、ピ、ピアノ、ですが」

僕がそう言つた途端、師匠は振り向き様に、ピアノの縁を「バン！」と叩いた。そしてもう一度、僕を振り返り、僕を指差して、こう言つた。

「いいが、駿平！ もう一度と、爾宮の家には行くな！ 分かつたなつ！」

師匠はレッスン室を出て行こうとしていた。

ドアのノブに手を掛けたまま、振り向いた師匠は、僕に言つた。「今日のレッスンは、これで終りだ。それから、来週はハノンだ。一からやり直す。分かったな」

そう言い終わつたか終らないかのうちに、師匠はドアをバタンと締めて出て行つた。

僕はキヨトンとしたまま、レッスン室にとり残された。

「師匠、どうしたんだろう？」

僕は訳が分からぬまま、しぶしぶのドアの前に佇んでいた。

十一、悩み

「どうしたの？ 元気ないわよ」

律子が心配そうに、声を掛けてくれたのだった。

吹奏楽団の練習日。それは、律子と会う日でもあるのだ。いつもと変わらない、同じ練習をしているのだが、どうしても練習に身が入らなかつた。だから、冴えないトランペットの音をさせて、コンダクターに注意されたのだ。

もつとも、注意されるのは日常茶飯事なのだが、今日は何度指摘されても僕が直せなかつたのだ。

「ああ、大丈夫だよ」

僕はそう答えながらも溜息を付いた。その様子を見て、律子の笑顔が曇つた。

「大丈夫には見えないわ。全然、駿くんらしくないよ、それって僕は精一杯の笑顔で取り繕つた。」

「そうかな？ 調子の悪い時もあるよ、僕だつてさ」
そう言いながらも、僕の肩はガツクリしていた。

律子の励ましに応えられない僕を見て、ホルンの奴がすかさず突つ込んできた。

「おやおや、もうケンカですか？」

ホルンのヤツは律子の顔を見た。

「いつもは仲の良いお一人さんなのにい」

そしてホルンのヤツは、また僕の顔を見た。

「穏やかじやありませんねー。恋人が心配そうにしてますよお」

そう言われて、律子は頬をピンクに染めた。

このアマチュアの吹奏楽団の中では、既に駿平と律子の仲は公認となつてているのだった。

律子は美しいクラリネットを響かせるようになり、時々ソロを演奏するようになった。

駿平もハイトーンがキレイに伸びるようになり、超ハイトーンが
出そうな程に成長が著しかつた。

だが、今日の駿平の音は冴えていなかつた。超ハイトーンなど望
むべくもない姿だつた。

駿平には理由が分かつていた。師匠「藤巻要」の言葉である。
『雨宮には近づくな！』

それが駿平の心に影を落としていたのだ。
だが、そんなことを律子には言えないし、駿平には言つつもりす
ら無いのだ。

駿平は律子のことが好きだから。

律子の笑顔が自分に向いていることが、一番嬉しいし、楽しいこ
となのだ。それを手放したくない。駿平の想いはその一念だつた。

「大丈夫だよ」

僕は開き直つて、笑顔を見せた。

だが、ホルンの奴がまだ突っ込んできた。
「旦那あ、ホントに大丈夫っすか？」

僕は精一杯の笑顔を見せた。

それでも、律子は心配そうだつた。

律子にそんな、心配顔をさせたくない。そう思つたら、心の底から
力が出てきた。

「律子、大丈夫だよ。心配させてゴメン」

僕は、いつもの僕に戻つた気がした。

律子は、そんな僕を見て軽くうなづいた。

「おう、駿平。さつきとは全然違うなー。やれば出来るじゃないか
コンダクターがそう言つて、僕に声を掛けた。

僕はコンダクターにグッジョブサインを出した。そして、律子の方を見た。

律子はこちらを見て、ニッコリと笑つてくれた。

その笑顔をいつまでも僕に。

「最近、おかしいわ

僕は、律子の言葉で我に返つた。

そして律子に聞き返した。

「え？ 何がおかしいって？」

律子は溜息を吐いて、肩を落とした。

「それをおかしいって言つてるの」

律子はそう言つて、溶けかかったソフトクリームをペロリとなめ

た。

駿平と律子は、日曜日に時々デートをするようになつた。

映画を見たり、ファミレスでだべったり、他愛もないデートだつたが、それでも律子にとっては新しく、楽しいひとときだつた。

普通の若者が普通にデートする。今までの律子には、そんな時間は許されていなかつた。

律子と駿平との仲は、母親の雨宮奈津子はもぢりと、父親の雨宮健一さえも黙認していた。

律子は、駿平というのが楽しかつた。

駿平と一緒にいる時は心が和んだ。

律子は、駿平といふ時間の大切にしたかつた。

だから、余計に駿平の元気がないことに、律子は心を痛めていた。

「ちゃんと話して。とっても気になるの」

そう言つて律子は、僕の顔を覗き込んだ。

ふと見ると、律子の持つているソフトクリームが溶けて、律子の指の上を流れ落ちていた。

「律子、アイスが！」

僕がそう言つと、律子は慌てティッシュで手を拭つた。

「あらー。ずいぶん溶けちゃつたのね」

律子は照れ隠しにニコリと笑つた。

ソフトクリームが溶けて、手に掛かっていることに気付かない程、僕を見つめていたのだ。

僕は、律子がそこまで心配しているとは思っていなかつた。

「解つたよ

「話すよ、律子にはちゃんと話すよ

僕はボツボツと話し始めた。

ピアノはハノンからやり直していくこと。

師匠の藤巻要一に雨宮家には近づくなと言われたこと。

でも、律子と会わないなんて考えられないこと。

板挟みでどうしていいのか、判らないこと。

駿平は律子に、思い悩んでいることを素直に話した。

「そうだったの」「うう

律子は、宙を見ながら考え込むように言った。

「お師匠さん、どうしちゃったのかしら？ 私の父や母と、何か関係しているのかしら？」

僕は、律子を見ながら言った。

「そこがよく判らないんだよ。何が、思い当たることはないかな？」

律子は、右手を顎に当てて考え込んだ。

「うーん、分かんないわ

「というより、父と母の昔のことは訊いたことがないの

僕はちょっと肩を落とした。

「そつか……」

問題は、すぐに解決しそうではなかつたが、駿平は律子に話をし
て、少し楽になつた。

律子が居てくれてよかつたと思つた。

駿平は更に律子が愛しくなつた。

そして、駿平が正直に話してくれたことが律子には嬉しかつた。

だが、自分の父親と母親が関与しているとは、思いもよらなかつた。

一人は、問題を共有したことで、幸福感を味わつていた。

十四、真理

僕は気晴らしに、一人で出掛けた。向うのはいつものライブハウス。

今日は律子と一緒にない。律子は、いつものレッスンだった。律子が初めて来た頃はそうでもなかつたが、最近はいつも律子と一緒にだつた。

ライブハウスのドアを開けると、マスターが声を掛けってきた。

「よお、駿平。今日は一人か」

僕はちょっと苦笑いした。

「ふられた訳じゃないだろうな？」

マスターは肘でグリグリしてきた。

「違うよ。今日は一人で來たかったんだ」

僕がそう言つと、マスターは怪訝な顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻つた。

「まあ、いいさ。そんな気分の時もあるわ」

僕はマスターの言葉に反応もしないで、ジャズが演奏されているステージに気を取られていた。

ふと見ると、ピアノには見知らぬ人が座つて、ジャズのスタンダードを演奏していた。

肩より少し伸びたセミロングの栗色の髪はマッシュコレイヤーベースで丸みをもたせたカットに、内巻きと外巻きのパークマをミックスさせたスタイル。

卵形の顔に、クリツとした大きな目が印象的で、左側だけに出来る笑窪が可愛い印象だつた。

紺色のパンプスに、黒のタイトスカート、赤のノースリーブのポートのシャツで、ピアノの前に座つて弾いていた。

「駿平、気になるか？」

僕はマスターの言葉でふと我に返つた。

「え、あ、うん」

生返事してから、僕はカウンターのコーラを飲み干した。

「誰？ 見たことないヒトだけど？」

マスターはニヤケながら言った。

「いい感じだろ。最近、時々来て弾いてくれるんだ」

いい感じでスイングさせて、ベースとドラムをリードしていた。僕はカウンターに座って、身体を反り返して彼女の弾くジャズに聴き入っていた。

そのあと二曲を演奏した後、彼女はピアノ前を立った。大きな拍手の中、お辞儀してからカウンターに彼女がやつてきた。

「マスター、お水をください」

マスターはタンブラーにミネラルウォーターを注ぎながら、ふざけて言った。

「ビールじゃなくて、水でいいのかい？」

彼女は「今日は水がいいのよ」と言つて、マスターからタンブラーを受け取つた。彼女はタンブラーをあおりながら僕の横に座つた。

「君ね、マスターお気に入りのピアノ弾きは

彼女はそう言つて、カウンターにグラスを置いた。

マスターが、彼女を紹介してくれた。

「阿川真理さん。アメリカから帰つたばかりだ。向こうで音楽をやつてたんだ」

彼女は右手を振つて答えた。

「落ちこぼれよ。何とか卒業できただけ」

マスターは、真理に僕を紹介した。

「戸倉駿平。昔からピアノを弾いてもらつてる。いいモノを持つてると思うんだがなー」

彼女はタンブラーの水を飲み干してから言つた。

「じゃあ、何曲か弾いて。聴かせてちょうだいよ

そう言つて、真理は微笑んだ。

僕は、ちょっと頬が赤くなつた。それから軽くうなずいて、ピア

ノに向つた。

まずはクラシックで、モーツアルトの「K485・ロンド」を、それからジャズのスタンダード「星に願いを」を、そして最後に「リトル・ルル」を弾いた。

彼女は、カウンターの上に向けて行儀よく背筋を伸ばして聴いていた。

僕がカウンターの席に戻ると、真理は拍手で迎えてくれた。

そして、最初のあいさつの時には無かった、優しい笑顔を、真理は僕に向けてくれた。

「駿平くん、上手いわ。あたし、ちょっと感動しちゃった」

僕はちょっと照れた。

最近の行き場の無い想いをぶつけたのだ。その想いが伝わったのがちょっと嬉しかった。

「今度、一緒にやりましょうよ」

そう言つて、真理は僕の腕を握つた。

僕は更に照れた。

「『一緒に』って、どうやって？」

僕がそう言つと、真理は僕の顔を覗き込んで言つた。

「決まつてゐるじゃない。駿平くんはトランペッタよ」

僕は「？」な感じだった。

「なんで、僕がトランペッタをやるつて知つてるの？」

真理は氣まずい顔をしながら、マスターを見ながら言つた。

「だって、マスター、そんなことを言つてなかつた？」

マスターは驚いた表情だった。

「駿平がペットやるなんて初めて聞いたぜ」

マスターは（どうなつてんだ？）といつ調子で駿平に詰め寄つた。

「俺は知らなかつたぞ。ペットなんて出来るのか？」

マスターは既に違うことを妄想していた。

「そうか、駿平がペットかー。面白いぞ、うん！」

真理はじまかすように言つた。

「ほ、ほら！ マスターもああ言ひてることだし

そう言つて、真理は僕にしがみ付きながらウインクをした。

僕は微妙な違和感があつた。だが、真理があまりにも積極的だったので、思わず僕はうなずいてしまつた。

「あ、ああ、分かった。いいよ」

僕がそう言つと、真理は来週の金曜日を指定した。金曜日は楽団練習日だ。そして律子も付いて来るはずだ。

「金曜日は……」

そう言ひ掛けた僕を、真理は制止して言つた。

「どうせ『遊び』なんだから、軽く考えてよね。じゃあ、来週ね」

そう言い終わると、真理はライブハウスを出て行つた。

僕は啞然としていた。

僕の横にマスターがさりげなく、静かに座つた。

「モテる男はツライねー」

マスターは僕の腕を突ついた。

「律子ちゃん、どう思うかな？」

マスターはそう言ひて、僕の肩を叩いた。

僕の肩は、マスターに叩かれる前に、ガックリと落ちていた。

ライブハウスで気晴らしのつもりが、僕には、更に悩みが増えてしまつた。

十五、過去

日曜日、律子の家に行つた。

師匠の「藤巻要一」から、雨宮家に行くのを止められていたが、師匠の真意を探りたいという想いがあった。

それよりも、律子と一緒に居たいという気持ちの方が大きかつたのだが。

いつもの通り、父親の「雨宮健一」は不在だつた。
いつもだつたら三人でセッションをするのだが、今日は止めた。
師匠に止められているので、それだけは守らねばならなかつた。話をする位なら許されるだろうと僕は考えたのだ。

一番ガッカリしたのは、母親の奈津子だつた。奈津子は、このセッションをなぜか心地よく感じていたのだ。奈津子の楽しみでもあつたのだ。

「あーら、残念。その師匠さんも厳しいわね」

僕は、母親の奈津子にその様子を話した。

「うちの師匠、あんなに怒つたのは初めてなんです。『雨宮の家には行くな!』って凄い剣幕でした」

母親の奈津子も困つた表情をしていた。

「うちで弾いちゃダメってどういうことなんかしら?」

僕は、母親の奈津子に聞いてみた。

「師匠の名前は『藤巻要一』っていうんです。心当たりありませんか?」

その名前を聞いた途端、母親の奈津子の動きが止まつた。そして、ティースプーンをカチャカチャと音を立ててソーサーに置き、震えるようにして、紅茶をすすつた。

母親の奈津子は、明らかに動搖していた。その様子を見て、律子が言つた。

「お母さん、どうしたの? なんか変よ

母親の奈津子は、ティー カップを両手で抱えたまま、独り言のように、か細くて小さな声で一言呟いた。

「あの人、戻つてたのね。ピアノ、教えてたのね」

母親の奈津子は、震える手で力チャ力チャと音を立てながらティー カップを置いた。

「そうだったの。だから何処かで聴いたことがあると思つたはずだわ……」

いつも気丈な奈津子だったが、動搖を抑えきれなかつた様子だ。「ごめんなさい。ちょっと気分が悪いから席を外すわ。駿クン、ゆっくりしていいで。律子、後はお願ひね」

そう言い終わると、席を立ちフランフランしながら応接間を出て行った。

僕と律子は、顔を見合せた。

「どういうことなんだ?」

律子も首を振つた。

「解らないわ」

二人は狐につままれた感じだった。どうも要領を得ないでいた。「お母さんの口ぶりでは、師匠さんを知つてゐみたいね」

「そうだな

「昔、何かがあつたのかしら?」

「たぶん、そうだろうな」

それだけしか解らなかつた。

ただ、明るくてたくましささえ感じる母親の奈津子が、気分を害してしまつほどどの出来事が隠されていることだけは間違ひなかつた。

「それ以上は解らないわね」

「ああ、僕らにとつては過去の闇の中さ」

僕と律子は、途方に暮れていた。

駿平が帰つた後、律子は母親の奈津子の部屋をノックした。

「どうぞ、入つて」

律子が入ると、母親の奈津子はベッドで横になっていた。

「じめんなさいね、お相手できなくて」

律子はベッドの端に座つて、母親の手を握つた。

「つづん、いいのよ。それに、駿平は私のボーイフレンドなんだもの」

奈津子は微笑んだ。

「そうね、そうだったわね」

「でもね、彼のピアノを聴いているとそんな感じがしなかった」

「昔の彼が弾いているようだつたのよ」

律子は、眉間にシワを寄せた。

「昔の彼？」

奈津子は右手を額に当てながら話し始めた。

「ええ、そう。藤巻要一は昔の彼氏だつた」

律子は、母親の衝撃的な発言に驚いた。だが、律子の様子などお構い無しに、奈津子は話し続けた。

「今、駿クンと律子のように、いえ、もっと仲が良かつたわ」

「私達は、共に高め合つていた、人間的にも音楽的にも」

奈津子の表情が少し曇つた。

「だけど、藤巻は突然、私の前から姿を消したの」

「何も告げず、さよならさえも無かつたわ」

「ホントに突然よ。昨日まで逢つていたのに！」

奈津子の頬を涙が伝つた。

「悲しかつたわ。辛かつたのよ。だから音楽に打ち込んだわ」

「それからあの人と、雨宮健一と結婚して今の地位を築いたの」

律子は母親の手をさすりながら、相槌を打つた。

「……そうなの。知らなかつたわ」

「じめんなさい、辛いことを思い出させて」

奈津子は涙を拭いながら起き上がり、律子の肩を抱いた。

「いいえ、そうじゃないのよ」

「お母さん、昔を思い出して楽しかつたのよ」

「ただ……」

律子は尋ねるよつに復唱した。

「ただ？」

母親の奈津子は、律子に微笑んだ。

「ただ、名前を忘れていただけよ」

そう言つて母娘は抱き合つた。

十六、告白

「定期演奏会まで、残り時間が少ない」
市民吹奏楽団の団長が珍しく姿を現して訓示を垂れた。
「なのに、仕上がり具合は今ひとつに感じられる」
「各自、モチベーションを上げて練習に臨むよ！」
そう言つて、団長は楽団員を見回した。
「はーいー！」

楽団員全員の返事が練習室にこだました。

指揮台には、団長と入れ替わつて主席指揮者が立つた。

「皆さん、大丈夫ですよ」

「ちゃんと出来ていますからあ

ちょっと女形の入つた指揮者だが、音楽の知識とセンスは抜群で、
コミカルな話法で人を引き付ける力があり、それが指導力の一部にな
つていて。

「じゃあ、最初の曲、いきます」

指揮者は、タクトを振り下ろした。

練習の中休み、楽団員は自販機の前で、カップを抱えながら談笑
していた。

その中に、雨宮律子と戸倉駿平もいた。

「どうか、お母さんがそんなことを

僕は、口を固く結んで考え込んだ。

律子は、カップを両手で抱えて、ゴクリと一口飲んだ。

「そうなのよ。お母さん、ちょっと寂しそうだつた」

駿平のピアノの師匠である藤巻要一は、律子の母親である雨宮奈
津子の昔の彼氏だったのだ。

律子は、そのことを母親の奈津子の口から聞かされた。

しかも、何の前触れもなく突然別れたということも語られたのだ

つた。

「師匠はそんな人じやないと思うけどな」

僕はレッスンの様子を語つた。

「いつも親父ギャグ連発の冗談ばかりだぜ」

「僕の話なんか、マトモになんか取り合わないよ」

「でも、ピアノの指導はツボを押さえてるよ」

律子は「ふうん」と聞いていた。

「でも、レッスン以外のことは何も知らないし、分からないな」

「師匠のレッスン室に行ってレッスンするだけだから、何処でどんな生活をしていたかなんてことはサッパリ……」

僕が言い切る前に、律子は僕の顔を見て言った。

「全然知らないのね」

僕はカップのコーヒーをすすりながらつづいた。

律子は、溜息をついた。

「さあ、時間だぞー！」

「後半の練習、始めますよー」

パートリーダー達の声が響いた。

律子と駿平は腰を上げた。

「終わってから、いつもライブハウスで話そつよ

僕がそう言うと、律子はうなずいた。

駿平は「ライブハウス」という言葉に違和感を覚えた。だが、どうして違和感がするのか、すぐに気付かなかつた。

十七、セッション

樂団の練習が終わった僕と律子は、練習場を出た。そして、いつものライブハウスに向った。

「お母さん、駿平との演奏で昔を思い出していたんだって」ライブハウスに着くまでの間、休憩時間に話していたことを繰り返した。

律子は、白のポロシャツに、ピンクのニットカーディガン、ベージュのタイトスカートに、ローヒールの白いサンダルで、清楚な感じだった。

「楽しかったって言つてたわ」

律子はしんみりと話した。

「デジヤヴな感じだつたんだろうか」

僕は母親の奈津子の心情を想像して言つた。
「でも、スッカリ名前を忘れていたらしいわ。心の中で封印していたのかもしれない」

律子がそう言つと、僕は額に手を当てて、師匠を思い出しながら考え込んだ。

話しながら歩いてきたので、あつとこつ間にライブハウスの前まで来ていた。

ぼくは、入り口のドアを開けた。
マスターが声を掛けてくれた。

「よお、駿平。いらっしゃい、律子ちゃん」

マスターの挨拶の違いに、僕は苦笑いした。そして、マスターは一言付け加えた。

「来てるよ、真理さん」

そう言われて、僕は固まつた。

そうだ、そうだった！

僕はすっかり忘れていたのだった。

「ライブハウス」という言葉の違和感はこれだつたのだ。

「真理、さん？」

律子は呟いたが、僕は律子の手を引っ張つて店の中に入った。

カウンターに真理が座つていた。

真理は田ざとく僕を見つけて手を振つた。

「駿平クン、こっち、こっち！」

大きな声で、真理は僕を呼んだ。

真理は、赤のサテン調シャーリングチューブキャミに、黒のローライズストレートパンツを穿いて、赤のハイヒールを履いていた。

「あら、今日はお友達と一緒になのね」

僕は、顔をひきつらせながら紹介した。

「僕のガールフレンドの、雨宮律子さん。吹奏楽団でクラリネットをやつて……」

僕が言い切る前に、もう知つているような口ぶりで、真理は答えた。

「あたし、阿川真理つて言います。時々、ここで駿平クンとセッションします。よろしくね」

そう言つて、真理は右手を出して、律子に握手を求めた。

真理の顔はにこやかな表情をしていたが、その目は全然笑つていなかつた。

律子はおずおずと右手を出して軽く握つて言つた。

「ど、どうも。よろしく」

律子の顔は、キツネに摘まれた不思議な顔をしていたが、明らかにちょっと不機嫌な感情が表情に入り混じつっていた。

「まだ、セッションなんてしてないよー」

僕はちょっと不機嫌に言つた。すると、真理は舌をペロッと出しながら言つた。

「今日、これからするのよね。それで、トランペットは持つてきた？」

僕はそんなつもりでなかつたし、それ以前に真理とのセッション

のことなどすっかり忘れていたのだ。

「持つてこなかつたよ」

僕は無愛想に答えた。

真理は目を輝かせて、僕の顔を見た。

「思つた通りだわ。そうじやないかと思つて、あたしが用意したわ」

真理は足元から、黒い大きなカバンを持ち上げた。それはプロテ

ックのトランペット用のトラベルセミハードケースだつた。

真理はそのトランペットケースを僕に渡した。

僕は仕方なく、ケースのジッパーを開けた。中からは、シルキー

のB五・GPが出てきた。

「これは！」

僕が叫ぶと、真理はニッコリ笑つて言つた。

「いいのよ、好きに使つて」

「持つて帰つてもいいけど、ここへ来る時は持つて来てね」

「あたしとのセッション専用つて訳」

真理は、紙切れをトントンとさばいてから、それを僕に渡した。

「これが楽譜よ。十曲ほどあるわ。でも、今日は最初だから一番上の一、二曲だけ、やりましょ」

真理はステージの方へ歩き始めた。

「楽譜を見てさらつておいて」

そう言い終わると、真理はピアノの前に座つた。そして、ベースとドラムでセッションを始めた。

僕は楽譜に目を落とした。その楽譜を、律子も覗き込んできた。

僕はその時まですっかり律子のことを忘れていた。真理に圧倒され続けていたのだ。

「あ、ごめんね。ビックリさせちゃつて」

僕は律子に優しく話し掛けた。

「この前、初めて会つて、セッションやるつって」

僕の言葉は、ちょっと空しく響いていた。

「マスターもお勧めの人だからさ」

僕は自分で言い訳っぽさを感じながら、律子に話しかけた。

律子は、僕の言葉よりも楽譜から田を離さなかつた。

何枚か楽譜をめくつて、じーっと眺めていた律子がポツリと言つた。

「これ、お父さんの書く音符だ」

僕は「え？」という感じだつた。それからもう一度、楽譜に見入つた。

「う～ん、そう言わればそんな感じもするなあ」

律子は、いつになく真剣な硬い表情をしていた。

そして、ステージ上のピアニストを凝視して、鋭く吐き捨てるよう

うに言つた。

「これって、どういふこと？！」

僕はなんと言つていいのか、解からなかつた。辺りをキョロキョロ

口するしかなかつた。

十八、嫉妬

僕は軽く音出しをして楽曲をさらつた。

さすがに、僕の欲しがっていたシルキーのB五だ。いい感じの吹奏感だが、金メツキは伊達じやない。響かせるのは難しかつた。だが、真理は何処で聞いたのだろう。マウスピースは、バックの3Cだつた。僕がいつも愛用しているマウスピースだ。しかもインナーギアタイプである。

トランペッタやマウスピースには違和感はなかつたが、いろんなことで合点がいかないことが多すぎる。どうして僕の欲しがつているトランペッタ、そしてマウスピースのタイプを知つていたんだ？僕がこの状況について考え込んでいたら、真理はピアノの前に座つて手招きしていた。

僕は楽譜をわしづみにすると、ステージへ向つた。
真理とのセッションが始まった。セッションと言つてもアドリブはない。楽譜もコードだけが書かれている訳じやなかつた。だが、

雨宮健一らしく、ちょっと工夫があつた。

一曲のつもりだつたが、お客さんのリクエストで、もう一曲だけ演奏した。

何しろ、全くの初見の楽譜である。上手く吹けつてのが無理に近いのだ。なんとかごまかしながらの演奏だつた。演奏が終わつた時にはもうヘトヘトだつた。

カウンター席に戻ると、律子が拍手と笑顔で僕を迎えてくれた。

「布拉ボー。素敵だつたわ」

僕は、律子に笑顔を返した。それから、マスターも声を掛けてくれた。

「駿平のペット、なかなかいいじゃないか」

マスターは、超ご機嫌でニヤニヤしていた。

「今度は、俺のベースとセッションだぞ」

僕は、マスターにグッジョブサインを出した。真理がステージから慌てて駆けて来て僕をハグした。

「駿平、最高だわ！ いい音、響かさせてくれたわね。ホントに良かつた」

真理の田の色は、先程とは違っていた。感動にあふれている感じだった。

「あたし、駿平が気に入つたわ。今度はちゃんと練習してやりましょよ」

そう言つて真理は、僕の手をぎゅっと握つてきた。

「ね？ 決まりね。連絡手段は、つと……」

真理は、僕の携帯電話を取り出させて自分の番号を入力した。着信状態にさせてから電話を切つた。

「これで、〇一ね。じゃあ、ペットは駿平が管理してよね」

そう言い終わると、真理は楽譜を片付けた。

「あたしはこれで失礼するわ。また連絡するわね」

そう言つて、真理は店を出て行つた。

真理は一陣の風の如く、強引であつという間に去つて行つた。

僕はポカーンと突つ立つていただけだった。

「……って、駿平つたら！」

律子が声を掛けてくれた時に我に帰つた。

「あ、ああ、ごめん」

律子は、かなり不機嫌で怒つていた。

「何なのよ、あの人！」

「ちょっと、駿平に馴れ馴れしいわ」

「一体、どーゆー関係？」

僕は答えに窮した。

「えっと、あの、どう言つたら……」

シドロモドロな僕に、マスターが助け舟を出してくれた。

「律子ちゃん、ごめんね。駿平とは何の関係もないんだよ

「うちの店でピアノを弾いてくれるんだ、あの人」

「それで、駿平を紹介しただけなんだ。それだけなんだよ、ホントだよ」

それでも、律子は僕を數睨みした。

「ホントオ？」

僕は真顔で答えた。

「ホントです、マスターの言う通りです」

僕は上目遣いに律子の顔を覗いた。

律子はまだ、ふくれていた。

「律子あ・・・」

僕がそう言つと、律子はじろりと睨んだ。

「なによっ！」

僕は恐る恐る言つた。

「ひょっとして、嫉妬？」

律子の顔が急に真っ赤になつて、僕の背中や肩をパンパンパンと叩いた。

「ち、違うわよっ！ もおー！」

そこへマスターが、コーラを二つ持つてきた。

「はい、はい、そこのお熱いお一人さん。これ飲んで、頭冷やしてね」

そう言い残して、マスターは去つていた。
僕と律子は、顔を見合させてブツと吹いた。
そして、二人でコーラで乾杯した。

とあるスタジオで、阿川真理はピアノを弾いていた。

レーズを弾き始めた。

しばらく弾いたところで、一人の男がスタジオに入ってきて拍手をした。

「阿川君、上手くなつたね。見違えたよ」

真理は途中で弾くのを止めて、男の顔を見た。

「アメリカでずい分勉強したようだね」

スダジオに入ってきた男はそう言った。

あにかといわこます。雨宮先生直々の「教授のお陰です」と、その男は、雨宮健一だった。

「再来月には録音に入るそうじゃないか。ついにデビューだね」

真理はうつむいて頬を染めた。

「まだまだ、先の話です」

雨宮は誇りしげに言った。

「何を言つてゐるんだ。世間は君を認めてるんだよ。自信を持ちな

七二

顔を上げた真理はうなずいた。

「ええ、そうですね」

極端なペアノの縁に手を掛けて言った。

「そんな忙しい時に変なことを頼んでしまったな」

真理は嬉々として言った。

「そんな」とありませんわ。私自身、興味が湧いてきましたから」

雨宮は少しホッとした様子だった。

「慣れない役回りだから難しいとは思うが、何とか律子に『憂い』

を教えたくてね」

真理の顔が少し曇つた。

「それを思つと、ちよつと胸が痛みますわ」

雨宮はキリッとした顔で言つた。

「いや、これは必要なことなんだ。奈津子もやつして会得してきたんだから」「

真理はそれでも浮かない顔をしていた。

雨宮は話を少し逸らした。

「ところで、戸倉駿平はどうだね？ 面白い『素材』じゃないかね？」

真理の顔は、急に嬉々としてきた。

「ええ、彼はいいモノを持つています。私自身、指導してみたいと思つました」

雨宮はニヤリとした。

「いいんだよ、指導しても。その段取りは、もつ付けたんじゃないのかね？」

真理はちょっと赤くなつた。

「よくご存知ですね。先生の計画通りに進めているだけですけど」

雨宮は、フフフと笑つた。

「まあ、いい。ところで、戸倉君の指導は誰か、知つているか？」

真理は首を横に振つた。

「藤巻だよ。藤巻要一」

真理はビックリした。

藤巻要一のピアノを聴いたのがキッカケで、真理は音楽を手指したからだった。

「え？ あ！ そうなんですか。……だから、私、彼のピアノに心

が動いたんですね」

真理は感慨深げに言つた。

雨宮は更に話題を変えた。

「戸倉君に例のモノは渡したのかね？」

真理は、気持ちを切り替えた。

「ええ、渡しました。喜んでいたというよりビックリしてました

「雨宮は無表情だった。

「律子から聞いた情報だ。間違いはないよ
「雨宮は『ヤリとした。

「私が『アーティザン』だよ、アーティザン

真理は、雨宮の表情がちょっと悲しかった。

今度は真理が話を変えた。

「アーティストを渡した時、律子さんと会いました

雨宮は真理の顔を見た。

「そうか、会ったのかね。今の娘は『恋する少女』だったひ

真理は探るように雨宮に言った。

「ホントに『倉君のこと、好きのよひですね。仲睦まじくて羨まし

いって感じでした」

雨宮は興味無さげに言った。

「今はそれでいい。だが、それだけではダメなのだ。『清姫の憂い』

が必要なのだ

それだけを吐き捨てるよつこいつ、雨宮は振り返り返りアーティストに近づいて行つた。

「時々、報告を頼む

雨宮は後向きでそつと立つて、スタジオを出て行つた。
真理ははじめてアーティストを見つめていた。
そしてピアノの前に座つた。

「戸倉、駿平……か

真理は、鍵盤の上に指を置いた。

「当て馬だなんて……

真理は、何事もなかつたかのように、アーティストを弾き始めた。

一一、演奏会

「開幕まで、あと十分でーす。楽団員は楽器を持って舞台袖に移動してくださいーー」

コンサートマネージャーの声が控え室に飛んだ。

市民吹奏楽団は、定期演奏会の日を迎えた。

その定期演奏会の開演を前にして、市民文化センター・大ホールの控え室は緊張に包まれていた。

舞台袖までの移動途中で、律子は僕に話しかけてきた。

律子が不安げな顔をして言った。

「やつぱり、緊張するわね」

僕は誇らしげに切り返した。

「そりゃかな？ この服を着たら、ビシッとしたけど」

僕はユニフォームに着替えた後、気持ちが引き締まった。黒のスラックスに白のサテンのシャツ、

そして紺色のブレザーが楽団のユニフォームだつた。

「律子こそ、コンクールで慣れてるんじゃないの？」

僕の言葉に、律子は首を横に振った。

「ううん、全然。いつも、いつも、緊張の連續よ

よく見ると、律子の右手が震えていた。

僕は、律子の肩をつかんだ。

律子は、つかまれた拍子にビックリした表情で、僕の顔をジッと見つめた。

「大丈夫さ。律子なら」

僕は、そう言って律子にグッジョブサインを出した。

それを見て、律子はニッコリと笑った。

「今日、お母さんは？」

僕は律子に聞いた。律子の答えは予想通りだつた。

「今日を楽しみにしてたから、きっと来てるわ

僕は、更に聞いた。

「お父さんは来ないよね？」

律子は引きつった顔をして言った。

「ええ、たぶん来ないと思つわ」

「駿平の方はどうなの？」

律子が聞き返してきた。

「両親は来るつて。それに師匠も誘つた」

律子はちょっとビックリしたようだつた。

「え？ 師匠さん、来てくれるの？」

僕はスマイルで答えた。

「うん。両親が挨拶したいからつて、無理やり来てくれつて頼んだんだ」

「来るかどうかは五分五分だけどね」

舞台袖に来たところで、マネージャーの声が飛んだ。

「パートごとに整列してください」

僕と律子は小さく手を振つて整列した。

「舞台に入りまーす」

マネージャーの声と共に、列が動き始めた。

律子は、舞台下手の最前列、指揮者の前の席で、僕は後段の真ん中の席だ。

共にファーストでパートリーダーなので、中央寄りの席である。律子の位置からだと、指揮者で客席が見辛いが、僕の位置だと、広範囲の客席が見渡せた。

演奏の合間のMCの時に、客席をチェックした。

律子の母親、奈津子は律子がよく見える位置、下手の前方の席に座つていた。

僕の両親は、中央で通路の少し上だつた。

師匠の姿を探したのだが、なかなか見付からない。

もう来ないと諦めかけた第一部の一曲目の時、下手の一一番後ろの席に座つているのが確認できた。

アンコールも滞りなく終わって、密出しとなつた。

楽団員は、ロビーのコンコースに並んで、お客様を見送りつつ、自分達のお客さんへ挨拶をした。

律子の母親と僕の両親がすぐにやつてきた。

「律子、よかつたわあ

そう言つて母親の奈津子が花束を渡してくれた。

「わあ、キレイ！ ありがとう」

律子は、僕の両親からも花束を受け取つていた。

僕は、キヨロキヨロして師匠を探した。師匠は、密出しの滞満に巻き込まれていた。

「師匠ーっ！」

僕がそう叫んで手を振ると、師匠は僕を見つけて寄つてきた。そして、両親に挨拶をした。

その時だつた。

律子の母親、奈津子が師匠である藤巻の腕をつかんだ。

藤巻はビクッとして奈津子の顔を見た。

奈津子の目からは涙がこぼれていた。

「要一さん！」

かすれた声で、奈津子はそう叫んだ。

藤巻は、こうなることを悟つていていたようだつた。

奈津子に丁寧に挨拶した。

「お久しぶりです。」無沙汰しておりました

そう言つて、藤巻は深々と頭を下げた。

奈津子は、ハンカチを口に当てて、一言を搾り出すのが精一杯だつた。

「あ、あ、あ、逢いたかつたわ

一一一、スタジオ

その電話は、部屋でくつろいでいた僕とビックリさせた。

「あたしよ、判る？」

電話に出た僕は、電話の相手が誰だか、すぐに判つた。

「阿川さん、ですよね？」

真理は、高い声で嬉しそうに答えた。

「覚えててくれたのね。嬉しいわ」

だが、真理の声は急に低くなつた。

「ところで、明後日の土曜日は空いてる？」

僕はスケジュール帳を見るまでもなく、顔をしかめた。

「土曜日はちょっと……」

僕は言葉を濁した。その答えに真理は、ちょっとむくれた。

「練習するつて言つたでしょ」

そして、真理は少しだけヒステリックな言い方をした。

「土曜日の午後、どうしても空けてよ！」

僕は唸つた。土曜日は律子とデートの約束だつたのだ。

僕がずっと黙つていると、真理は懇願するように言つた。

「お願ひよ、どうしても聞き入れて欲しいの」

真理は声のトーンを更に低く変えた。

「理由はね、スペシャルゲストが来るのよ。その人に、どうしても駿平のペツトを聴かせたいのよ」

僕は、それが意味が分からなかつた。だが、僕のペツトを聞かせる相手とは誰なのが気になつた。そして、おずおずと訊いてみた。

「スペシャルゲストって、誰ですか？」

真理は（しめた）と思つて途端に元気になつた。

「桜沢宗和よ」

僕は色めき立つた。僕の知らない名前ではなかつた。といつより僕の憧れだつたのだ。

「え！ アメリカで売り出し中の……、あのジャズトランペッター！」

真理は得意そうに言った。

「ええ、そうよ。来日公演のオフ日なんだけどね、面白そうだって、来てくれることになつたの」

僕はドキドキして、つい口走つた。

「桜沢さんに逢えるんですか！」

僕の、その反応を聞いた途端に真理は声色を使つた。

「どお？ これでも予定、空けられないかしら？」

僕は一も二も無く即答した。

「行きます、行きます！」

真理は勝ち誇つたようにしゃべり始めた。

「土曜日の午後一時に、ノスタジオに来てね。じゃあ、待ってるわ。そう言い終わると真理からの電話は切れた。僕はしばらく、その余韻に酔いしれた。

「桜沢宗和、かー」

「彼の喇叭が聴けるんだー」

「そして、彼と一緒に吹けるんだー」

僕はしばらくボーッとしていたが、しばらくして興奮が冷めると、改めて大変な事態に気付いてきた。

『ダブルブッキング』である。

律子とデートか、それともジャズトランペッターの桜沢宗和か。どれだけの時間、悩んだらう。数秒だったか、数分だったか、分からぬ。

僕はいつの間にか、律子に電話を掛けていた。

「あ、律子？ 駿平だけど」

「あのや、今度の土曜日なんだけどね」

「うん、そう、デート、だよね」

「急に用事が出来ちゃつてー」

「うん、……そなんだ」

「……うん。どうしても抜けられないんだ」

「ごめんね。ホントにごめん」

「今度、埋め合わせするから」

「じゃあ、また」

僕は、深い罪悪感の中にズブズブと沈んでいく自分を見出していた。

土曜日の午後、僕はNスタジオに向かっていた。

真理に管理するように言われたトランペットを持つて。

受付で名前を告げると、二階の三番スタジオだと教えてくれた。スタジオのコントロールルームに入ると、既に一人はスタジオの中でセッションを始めていた。

マネージャーらしき人が、僕に声を掛けってきた。

「戸倉駿平クンだね。ちょっと、ここで待っててくれる？ もうすぐブースから出てくるから」

そう言つてマネージャーは、壁際のソファへ座るよう案内してくれた。

それから十分ほど、途切れることなく演奏が続いた。

目の前に、憧れの桜沢宗和がいる。

しかも、聴いているのは数える人達だけ。

そう考えると、鳥肌の立つような興奮に包まれた。

音楽が鳴り止むと、重いブースの扉が開いて、真理と桜沢が出てきた。

「お疲れ～」

「最高だつたよ」

マネージャーやエンドジニアが一人に声を掛けた。

真理は田ざとく僕を見つけると小走りに近寄ってきた。

僕がソファから立ち上がると、真理は僕をハグした。

「駿平、よく来てくれたわ。待つてたのよ」

真理は、振り向いて桜沢に僕を紹介した。

「いやら、せつとき話した戸倉駿平クン」

僕は、モジモジしながら頭を下げた。

「あ、は、初めまして。戸倉と言います。お会いできて光榮です」

真理は更に付け加えて言った。

「いい音を聴かせてくれるのよ」

桜沢はニヤリと笑つて僕に握手を求めてきた。

「桜沢です。よろしく」

僕はもう恍惚状態だった。

「阿川から聞いたよ。ずい分と氣に入られたんだね」

僕は少し照れた。

「じゃあ早速、一緒にやつてみよう。雨宮先生の楽譜だったよね、阿川？」

真理は罰の悪い顔を一瞬したが、すぐに笑顔に戻つて返事をした。

「ええ、そうよ」

桜沢は、僕をブースへと誘つた。僕は、楽器を取り出し楽譜を抱えてブースの中に入った。

スタジオでは、ほとんど個人レッスンのようだった。

桜沢は丁寧に、しかし厳しい声も掛けて、僕をつまくリードしつつ、僕を伸ばそうとしていた。

コントロールルームでは、密かな話が進んでいた。

まず、エンジニアが喋つた。

「彼、音響的にいいモノを持つてるね。音の輪郭がハツキリしている。それでいてメロウな部分もちゃんとある」

今度は、マネージャーが喋つた。

「あの子、ルックスはいいよね。ピアノも、そこそこ弾けるんじよ。美味しいかも」

真理は、ガラス越しの駿平を見ながら言った。

「雨宮先生の頼みだったので渋々だったんだけどね」

真理は頭を振つた。

「雨宮先生は昔からやり手で通つてたけど、娘の為に娘の恋人を横恋慕しきるだなんて」

真理はフツと息を吐いてから言った。

「ちょっと信じられなくなつたわ」

真理はもう一度、溜息を吐いてから話を続けた。

「でもね、彼に会つて彼の演奏を聴いて気持ちが変わつたわ。彼を私のバックに付けたいと本氣で思つたのよ」

マネージャーがボソリと呟いた。

「全く、真理さんも我がままなんだから」

マネージャーは、エンジニアと顔を見合わせながら呟いた。

「でも、いい素材であることは間違いないね、うん」

真理はマネージャーを見てニヤリとした。

マネージャーも真理と目が合つた瞬間、ニヤリとした。

四十分が経過したところで、桜沢は僕に声を掛けた。

「唇がツライだろ。少し休憩しよう」

僕はそうでもない感じだったが、ペットを口から外すと唇がジーンとした。

ブースの中から出てきた桜沢はこう言った。

「阿川、彼をアメリカに連れて帰つていいかい？」

真理は慌てた。

「ダメ、ダメ。ダメよ！ 私が先よ」

桜沢はニヤリとして苦笑した。

「やつぱり、ダメか」

僕は、異常に照れ臭かった。

しばらく雑談をしていたが、真理は痺れを切らしたように言った。

「さあ、セッショントリニティ」

真理はエンジニアを振り返つて言った。

「ちゃんと録音してちょうだいよ。それもどびつきの音でね」

エンジニアは真理に敬礼した。

「了解。バッヂリ録りまつせ」

真理は僕を見て微笑んだ。

「さあ、楽しい音楽の始まりよ」

三人はブースの中に消えて行った。

「また音色が冴えてきたね」

雨宮健一は、律子にそう告げた。

律子は、黙々とショパンのエチュードを弾いていた。

「嫉妬の気持ちがよく出でているよ」

そう言われて、律子はミスタッチした。

「いいねえ。動搖してゐるところがもつといい」

健一は嫌味としか意味が取れない言葉を吐き続けた。

律子は弾き終えると、溜息を吐いた。

そして、父親の健一を睨んだ。

「おつと。そんな目を向けるとは。わては、戸倉君にふられたのか？」

律子はピアノをバンッ！と叩いた。

「そんなんじゃないわ！」

健一は、ニヤリと不敵な笑いをした。そして、軽くうなづいた。

「そうか、『まだ』そうではないのか」

律子は、健一の言葉に首を傾げた。

「『まだ』つて？」

律子は健一を睨みつけた。

「それ、どういう意味？」

健一は、咳払いをして「まかした。

「いや、他意はないよ。ちょっと言い間違えただけだよ」

あくまでも優しいトーンで、健一は話をした。

「そろそろ、コンクールの準備をしなくてはね。いつまでも生温いことをやつていてはいけない。土曜日、場所を変えてレッスンをしよ」

「よ」

律子の表情は暗くなつた。

その様子を見て、すかさず健一は言つた。

「どうした？ 浮かない表情だね。土曜日はダメなのか？」

土曜日は、駿平とデートのはずだった。だが、駿平が断つてきたのだった。律子は思い出していた。

「大丈夫です、空いてます」

その言葉を聞いて、健一はほくそえんだ。

「じゃあ、Nスタジオでレッスンをするから」

律子は「クリ」とうなずいた。

土曜日のお昼、律子は健一と一緒にNスタジオに入った。二階の一番スタジオでレッスンだった。

健一はいろんな曲を、律子に初見で弾かせた。

古典派のハイドン、モーツアルト、ベートーベン。

ロマン派のショーベルト、ショパン、スクリヤービン。

近代のラヴェル、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ。

「どれもシックリこないな」

健一は首を傾げながら、様々な楽譜を律子に弾かせた。だが、律子にはコンクールの選曲しているように思えなかつた。いつもの健一なら、こんな手間は掛けないはずだつた。ただ、闇雲にピアノを弾かせているようにしか、律子には感じられなかつた。

五時間もピアノを弾いていた律子には、明らかに疲れが見えていた。

その時、健一の携帯電話に着信が入つた。その着信音を聞いた健一は、律子にこう言った。

「疲れただろう。廊下で休憩するといい」

律子は無言でピアノの前を去つてスタジオを出た。二階のロビーの自販機でジュースを買い、近くのソファに座つて飲んでいた。律子がロビーでしばらく佇んでいると、隣のスタジオから人が出てきた。

書類カバンを持った男とセミロングでワンピースの女性、そして楽器ケースを持った男が一人だつた。

一人の楽器は明らかにトランペットで、一人は派手な服を着ていた。もう一人は学生風の何処かで見覚えのある服だった。学生風の男は、どこかで見覚えのある、プロテックのトラベルセミハードケースを持っていた。そして、セミロングの女性と腕を組み、手をつけないで、仲良さそうに話していた。

その学生風の男を見て、律子は紙コップを落とした。
そして、大きな声で叫んだ。

「駿平！」

律子は、思わずソファから立ち上がった。

「駿平がなんでここに居るのよ！」

その声に気付いた駿平は、振り返った。

駿平には青天の霹靂であつた。

駿平は、この世の物ではないモノを見るような目で律子を見つめ、口をパクパクしていた。

「え、あ、なに？ どういうこと？」

腕を組み、手をつないでいたセミロングの女性も、一いつを振り返つた。

律子は、それが阿川真理だとすぐに分かった。

「え？！」

律子の顔からは、血の気が失せていた。

「なんで！？ なんで阿川さんと一緒になの！？」

真理はビックリしていなかつた。むしろ、薄ら笑いさえ浮かべていた。そして、わざとらしく駿平の腕にしがみ付いた。

「あら、駿平の『お友達』の律子さんじやない」

真理は平然と答えた。

「どうしたの、こんなところで？」

そして真理は、律子に流し田で究め付けの台詞を吐いた。

「まさか、駿平を追つ掛けてきたのかしら？」

律子は、真理の言葉が終わらないうちに、駿平の前を走り去り、階段を駆け下りて行つた。

律子を追おうとした駿平の腕を真理は放さなかつた。

「ダメよ、駿平。これから桜沢宗和と食事なのよ。君が抜けたら、とっても困るわ」

駿平はその場でうな垂れた。

スタジオのドアを半開きにして、その様子を覗いていた雨宮健一がいた。

真理は、すかさず雨宮の表情をチラリと見た。雨宮は真理と視線が合つたことを確認するとシッカリとうなずいた。そして、雨宮の満足気な顔に、真理は背筋が寒くなつた。

一一三、横恋慕

定期演奏会が終わった市民吹奏楽団はいつも、次の一週間は休みだつた。

今日が演奏会以降、初めての楽団の練習だつた。いつもの時間に練習場に入ると、フルートの女達が僕をジロジロと見ていた。クラリネットの女達は僕を指差していた。

嫌な雰囲気だつた。何となくその様子から悟るモノはあつた。

楽器を取り出して、演奏の準備を始めるとホルン吹きが飛んでき

た。

「おいおい、戸倉！」

ホルン吹きは僕の肩に手を回し、僕の耳元で小さな声で言つた。

「雨宮と何かあつたのか？」

僕はドキッとした。

僕が上手く答えられないでいる、ホルン吹きのヤツはニヤリとしながら知つたかぶりで喋り始めた。

「やっぱりな」

ホルンのヤツは知つたかぶりな感じでうなずき始めた。

「雨宮、楽団を辞めたらしいぞ」

僕を指差して、ホルンのヤツはこう言い切つた。

「やっぱり別れたんだ、こりや……そつか、そつか」

そう言って、ホルン吹きは僕の言葉を聞かずに入と去つて行つた。

（そういうことか）

僕は何も悟つた。

桜沢宗和を困んだ食事会は十一時に終わつた。

「駿平クン、またな。次回はアメリカで待つてるぜ」

そう言い残して桜沢は、お付きの車に乗り込んで去つて行つた。

「アメリカって、なんだ？！ さっきの話なんて冗談でしょ？」
今の僕はその意味を理解しようとする気分でも気持ちでもなかつた。

一刻も早く、律子に連絡を付けたかった。だが、真理はそれを簡単には許さなかつた。

真理は僕を諭すように静かに言った。

「私には君が必要なのよ、音楽的にね」

そして、僕の様子を下から舐めるように見上げた。

「考えておいてね、約束よ」

僕はますます解からなくなつた。戸惑いと不安とで呆然とする僕に、真理は僕の頬にキスをした。

僕の心臓はバクバクと鳴つた。

「駿平クン、また連絡するわ。いい返事を期待してるわよ

そう言つて真理はタクシーに乗り込んだ。

僕はしばらくボーッとしていたが、すぐに大事なことを思い出した。僕は慌てて律子のところに電話を掛けた。

考えれば当然のことだが、律子の携帯電話は電源が切られていた。しないよりはマシだらうと、メールを送つて帰路に着いたのだった。

それから楽団練習日の今日まで、律子からの連絡は全く無かつた。そして、こちらから連絡しても何の音沙汰もなかつた。

自宅に連絡を入れると母親の奈津子が電話に出てくれた。だが、奈津子は僕に気を使いつつ応対してくれたが、奈津子から出てきた言葉は冷たかつた。

「駿クン、ごめんなさい。律子、もう連絡しないでほしいって」

その後何度か、携帯電話をコールしたが着信拒否され、自宅の電話も奈津子が出てくれたが相変わらず対応は冷ややかだつた。

僕の心の中は、絶望が支配していた。

そして、今日の楽団の雰囲気だ。僕の心には「ブルー」以外の色

はなかつた。

合奏が始まる前、指揮台にバンドマネージャーが立つた。こういう時は、重要な話があるのが常だつた。

「えー、ファースト・クラリネットだつた雨宮律子さんですが、先日の演奏会をもつて退団、ということになりました」

練習場は一瞬、騒然とした。だが、それに関係なくバンドマネージャーは続けた。

「今後はピアノの方に専念されるということです」

樂団員は更にざわめき、僕を横目で見る視線が痛かつた。

僕は、納得できない感じだつた。どうにも腑に落ちない何かが、

心の中に引っ掛かつていた。

樂団の練習が終わつて、僕はいつものライブハウスに行つた。相変わらず、マスターがにこやかに声を掛けてくれた。

「よう、駿平。今日は一人か」

マスターは、顎で店の中の方をしゃくつた。

「今日も真理さん、来てるぜ」

そう言つて僕の背中を押して、店の中に引っ張つた。真理はカウンター席でカクテルを飲んでいた。その様子を見て、マスターは僕に耳打ちした。

「真理さん、様子がおかしいんだよ。今日はピアノを弾かずにギターと飲んでるんだ」

不意に、マスターは僕の肩を叩いた。

「駿平、あとは任せたからな」

マスターはそう言い終らないうちに、店の奥へと引っ込んで行つた。

僕は、真理の横に座つた。

「誰？」

真理は髪の毛を掃い上げて、こちらを見た。

真理はビクッと驚いた。

「あ……駿平

「ごめん

「でも、嘘じやないのよ」

真理は、うわ言のみじなことを言いながら、僕にしな垂れてきた。真理がどういう意味でその言葉を言ったのかは解からないが、僕は真理の背中に手を回し、そつと撫でた。

「アメリカ行きは本当のことなのよ

真理は下を向いて、僕に寄り掛かったまま、先程よりはシックカリとした声で言つた。

僕は鼻でフンと笑いながら言つた。

「あの話は冗談でしょ？」

真理は、僕の顔を見た。

「いいえ、違うわよ。本気よ」

僕は、酔っ払いの真理の言葉はとても信じられなかつた。

「それってどういうこと?」

僕は真理の背中に回した手を離した。

真理はムックリと起き上がつた。そして駿平を見た。

「桜沢が言つてたことはホント。冗談のよに話してたけど、ホントなのよ」

真理は急に酒が抜けたような顔になつた。

「私も録音が終わつたらアメリカに行くの。そして、桜沢と組んであちらで活動する予定」

真理はグラスのカクテルを一口あおつた。

「そこに君も来て欲しいの」

僕には寝耳に水だつた。真理や桜沢が、そんなつもりだつたなんてこれっぽっちも思わなかつた。それに、僕には気掛かりなことがあつた。

「でも、僕は……」

「そう言つと、真理は僕の目を見つめた。

「ええ、分かってるわ。律子さんのことでしょう？」

真理は、カクテルをもう一口あおった。

「私がピアノも弾かずに飲んでるのはそのせいよ」

そして、真理はカクテルを飲み干した。

「大丈夫よ、そのことは。でも、今は何も言えないの、勘弁して。でも、必ず私が何とかするわ」

そう言って、真理は僕の手を握つてきた。

僕は小刻みにうなずいた。

「僕はどうすれば……」

僕は不安げにそう言つと、真理は握つていた僕の手を更に強く握つてきた。

「時が来たら事が動くわ。それまではじつとしていて」

僕は真理を見つめてうなずいた。

真理は僕に抱きついてきた。

「私は、君の才能に惚れたのよ。律子さんとは違つ愛し方なの。それだけなの」

真理は涙ぐんでいた。

「考えておいてね、アメリカ行き。お願ひ、よ

そう言い終わると真理は席を立ち、フフフフしながらライブハウスを出て行つた。

僕は複雑な気持ちだつた。

律子との恋の行方。

真理との音楽の行方。

違う話のようでそうでもない。

三角関係のようでそうでもない。

悲しい気持ちや絶望感を持ちながら、高揚感と嬉しい気持ちをも

持ち合わせている、今の僕の心の中。

僕はライブハウスに流れる音楽を、聞くともなく聞いて、時間を過ごした。

藤巻が自分のレッスン室であるロフトの鍵を開けて中に入り、
した時、後から、若い女性に声を掛けられた。

「藤巻先生、お久しぶりです」

その声がする方に反射的に素早く振り返った。

「なんだ、君か」

藤巻の驚きは安堵に変わった。

そこに立っていたのは、阿川真理だった。

「ずい分、立派になつたなあ」

そう言いながら、レッスン室のドアを開けると同時に、真理をレ
ッスン室の中に招き入れた。

「君が初めて俺のところに来た時は、小学生だった。ピアノはある
か、何も出来なかつたのにな」

真理は照れながら、クスッと笑つた。

「それはそうですわ。先生のピアノを聞いてから始めたんですもの、
音楽を」

藤巻もフフと笑つた。

「そうだつたつけな」

レッスン室の隅にある、古ぼけて艶がなくなつたレザーノンのソファ
に真理は腰掛けた。

「先生、あの頃と何も変わってないです」

真理は古ぼけたソファの表面を撫でた。

「このソファ、懐かしいわ」

そこへ、コーヒーをなみなみと注いだマグカップを一つ、藤巻が
持つてきた。そして、一つを真理の前のテーブルに置いた。

「変える必要がないからな」

藤巻は、自分の淹れたコーヒーをすすりながら言った。

「今日はどうしたんだ？ 俺のところなんかに来る必要は、もう無

いはずだぞ」

真理は「コーヒーを一口、ゆっくりと飲んでから、言葉を出した。
「そんなことは無いですわ、先生。私の原点は、先生なんですもの。
いつでも、原点に戻つて確認したいですわ」

藤巻はその言葉に照れて、コーヒーをガブガブと飲んだ。

真理はマグカップのコーヒーを見つめていたが、やがて、藤巻を見据えてこう言つた。

「先生、実はお願ひがあつて來たんです」

その言葉に、藤巻はたじろぎ屈直つた。

「藪から棒に何だ?」

真理はまた俯いて、マグカップを見つめた。

「あの、戸倉駿平クンのことなんです」

藤巻はピクツとした。そして、一瞬のうちに思考が頭の中を駆け巡つた。

「ま、まさか……」

真理は、マグカップを見つめたままうなずいた。

「ええ、雨宮先生に頼まれて……」

藤巻は、左手の親指のつめを噛んで「チッ」と唇を鳴らした。

「そつだつたな。君も一応、雨宮の門弟だつたな」

藤巻は「コーヒーをあおつた。

「雨宮のやつ、未だに『憂い』なんて言つてるのか。横恋慕の好きな奴だ、まつたく」

だが、真理は髪を振り乱すほどの勢いで顔を上げて、藤巻を見据えた。

「でも、今は違つたんですつ! もう、そんなつもりじゃないんですつ!」

藤巻は真理を睨んだ。

「何が違つたんだ?」

真理はスッと立ち上がり、藤巻と変わらぬ形相で藤巻を睨み付けた。

「私は、彼と音楽がしたいんです。藤巻先生譲りの、彼の感性が欲しいんです」

藤巻は眉間にシワを寄せ、一瞬たじろいだ。

「ん？ どういうことだ？」「

真理はソファに腰を下ろして、静かに話し始めた。

「最初は、雨宮先生の思惑通りに彼を誘惑しました。何度か、彼のピアノの演奏、そしてトランペットの演奏を聴きました。それで、だんだんと彼の才能に引き込まれていきました」

藤巻は、顔を背けて聞いていた。

「桜沢宗和をご存知ですか？」「

真理がそう言うと、藤巻は後ろ向きのままうなずいた。

「桜沢と私は、組んでアメリカで活動する予定なのですが、桜沢がトランペット奏者を一人望んでいました」

真理はソファに座り直した。

「そして、彼を桜沢宗和に引き合わせました。桜沢も、彼が気に入りました」

藤巻は白いTシャツの背を向けたままだつた。

「駿平を連れて行きたいんです！ 彼を育ててみたいんです！」

藤巻はゆっくりとこちらを向いた。

「君に『育てたい』なんて台詞は十年早いぞ」

真理は恐縮した。

「生意気言つてすみません」

藤巻は真理を睨んだ。

「だが、本気なんだな？」

その言葉に真理はシッカリとつなづいた。それを見て、藤巻は伸びをしながら言つた。

「まあ、そろそろ、奴も追い出す時期に来ているがな

そう言つた藤巻の顔は少し緩んでいた。

「でも、そのままだと雨宮の思つ壺だぞ。雨宮律子のことを、君は知つてゐるのか？」

藤巻の言葉に、真理は真顔になつた。

「律子さんことは承知しています。でも、一人を引き裂くことは思つていません」

真理は急にうつむいた。

「……確かに、途中まではそつでしたけど」

真理は居住まいを正した。

「駿平は、ホントに律子さんことが好きです。律子さんもわいです

藤巻は頭を搔きむしつた。

「ややこしいことは苦手なんだがなー。ま、教え子のことだ、何とかしなきやな」

藤巻の言葉に、真理の表情は明るくなつた。だが、藤巻は厳しい言葉を続けた。

「だが、君に選択権はないんだぞ。選択権があるのはあの二人だ。二人が何を選択しても文句は言えない」

藤巻は厳しい顔になつた。

「いいかい、これだけは約束してくれよ」

藤巻は真理を指差しながら微笑んだ。

真理は、二コツとしてうなづいた。

一十五、奈津子と要一

「ほんなどころで、レッスンしてこちらしゃったのね

初めて訪れた藤巻要一のレッスン室をマジマジと覗回した雨宮奈津子は要一を振り返って言った。

「むず苦しくて申し訳ないね」

そう言って、要一は頭をかきむしめた。その言葉を受けて奈津子は首を振った。

「こ、そんないわ。要一さんじへいわ。いつからじじでレッスンを？」

奈津子は要一の方を振り返って訊いた。

「日本に戻ってきてからだから、十年くらい前かな。細々とやってるよ」

奈津子は、ピアノに駆け寄って弾いてみた。

「これ、昔のままのピアノね」

要一は、ピアノの側板に手をかけて、それに応えて言った。

「そうだよ。使い慣れた道具が一番さ」

奈津子は嬉々としてピアノを引き続けた。

「なんだか、とっても懐かしいわ」

奈津子は嬉しそうに話したが、どこか表情が暗かった。要一はそれを察して話を切り返した。

「世間話や思い出話だけのために来たんじゃないだろ？」

その言葉を聞いて奈津子は、ピアノを弾く手を止めた。

あの土曜日の出来事は、奈津子にとってもショックキングなことだつた。

律子が手ぶらで家に帰つてくるなり、部屋に閉じこもつたままで口も聞けない有様だつた。

だが、律子の父親であり奈津子の夫である雨宮健一は、全く動じ

ていなかつた。むしろその事態を歓迎さえしている様子だつた。

戸倉駿平から掛かつてくる電話の応対で奈津子は薄々感じていたが、まさかと思いながら一、二日して落ち着いてきた律子に、なだめるように聞いてみたのだつた。

土曜日のスタジオのレッスンのこと、休憩していたら別のスタジオから駿平が現れたこと、そしてそれが横恋慕だつたこと。

奈津子は、律子の話を聞いて愕然とした。

『あの人、またやつたのね』

奈津子は、そうとしか思えなかつた。健一が自分の娘にさえそんな想いをさせるとは考えもしなかつた。

だが、悲しんでいる娘の律子にそのことを話すべきかどうかの判断はつかなかつた。それよりも律子を慰めることができ先だと、今しなければならないことだと母親である奈津子は思つた。

「律子、今はあなたを慰めることしかできないわ。『めんなさいね』そう言つて、奈津子は律子を抱きしめた。そして、誰に相談しなければならないか、奈津子の心にはすぐに思い浮かんだ。

藤巻要一 であつた。

すぐに、藤巻要一ところに連絡を入れ、奈津子は藤巻のレッスン室に出向いてきたのだつた。

「うちの人、また……」

古ぼけたソファに座つた奈津子は、目の前に置かれたマグカップになみなみと注がれたコーヒーに手を付けず、神妙な顔でポツリと咳き始めた。

だが、マグカップを持ったままソファの前で仁王立ちしていた要一は、奈津子の言葉をさえぎつた。

「ああ、知つてゐるよ」

要一から発せられた意外な言葉に、奈津子は要一の方に向けて顔を上げた。

「……知つてたの?」

要一は、奈津子と向き合つて反対側のショアに腰を下ろした。

「ああ、健一の仕掛け人にはせられたのは、阿川真理だ」

「そう言って、要一はグビグビとコーヒーを飲んだ。

「阿川真理さんって、うちの人の門下生の？ 来年デビューだって、うちの人が言ってたわ」

奈津子は少し驚いていたが、要一は相槌を打ちながら続きを話した。

「一番最初は、俺の弟子、だつたんだがな。その話はまあいい。その阿川真理が、ちょっと前にここを訪ねてきたんだ。そして、そのことを告白したんだ。」

奈津子は更に驚いて、落ち着きがなくなっていた。そんな奈津子の様子を見て要一が声を掛けた。

「大丈夫だ。真理は横恋慕じやない。もつとも途中まではヤツの言うなりだつたそうだがね」

要一は落ち着き払つた声で淡々と述べた。要一の言葉に安堵しながらも、奈津子は律子のことを思つと気が氣でなかつた。

要一は、テーブルにマグカップを置いて話し始めた。

「でも、俺達の時と同じような状況だ」

その言葉を聞いた奈津子は表情が硬くなつた。

「お、同じつて？」

要一は身を乗り出した。

「真理のヤツ、駿平をアメリカに連れて行きたい、って言つてるんだ。もうその渡りも付けたらしい。どこまでが、健一の企みなのかなは解からないがな」

奈津子は下を向いたが、要一は話を続けた。

「だが、真理には釘を注しておいた。『選ぶのは駿平だぞ』ってね

奈津子はよつやく、コーヒーに口を付けた。少しすすつてから顔を上げた。

「そう、そんな話になつていたの。律子はどう思うかしら」

要一はコーヒーをすすつて、言葉を出さなかつた。

奈津子は深い溜息をついてから呟いた。

「律子は付いて行くかしら？ それよりもうちの人がそれを許すかしら？」

要一は腕を組んだ。

「まず、無理だろうな。俺達と同じ道を辿るつて訳か」

マグカップを持つ奈津子の手が小刻みに震えた。

「それは、それはあんまりよ。私と同じ想いを律子にはさせたくない」

奈津子は顔を上げて、要一の顔を見つめた。奈津子のその頬には涙の跡があった。

要一は身体を伸ばし、マグカップを持つている奈津子の両手を包み込むようにそっと握った。

「君次第だよ、奈津子。君がシッカリしないとダメだ」

要一は、奈津子の手をシッカリと握った。

奈津子は、要一を見つめてうなづいた。

その時、レッスン室の扉が開いた。

「師匠、おはようございま～す」

そう言つて入ってきたのは、戸倉駿平だった。

「今日はバツチリ練習してき……」

駿平は言いかけた言葉を途中で切り、ドアのところへ動きを止めた。

「あれ？ 律子のお母さん……」

駿平は、ビックリして目を丸くした。

奈津子は、優しく駿平に微笑んだ。

「しばらくぶりね。元気そうで何よりだわ」

駿平は慌てて頭を下げて詫びた。

「すみません！ 僕が、僕が……」

ひたすら謝り続ける駿平に、奈津子は声を掛けた。

「いいのよ、謝らなくて。大丈夫よ。」

それでも頭を下げ続ける駿平の肩を要一が呴いた。

「もういいんだ、駿平」

駿平は要一の顔を見上げた。それに呼応するよつと要一はうなづいた。

「事情は分かつていて。今度、律子さんも加えて話をしよう」

要一の言葉に、奈津子はうなづいて言った。

「そうね、それがいいわ。そうしましょ」「よつよ

駿平は頭を上げて、潤んだ目を奈津子と要一に向けていた。

要一と奈津子は、駿平に向つてうなづいた。

一十六、対決

気だるい日差しの日曜日の午後、僕と師匠の藤巻要一は雨宮家の応接間に居た。

当然の如く、父親の健一は不在だった。

母親の奈津子が一番好きなディンブラのストレートティと、奈津子が手作りしたクッキーを、四人は無言で口にした。

奈津子は、藤巻の顔をジーツと見つめていた。藤巻も、奈津子を時々見つめていた。そして、一人は時々うなずき合った。時間が引き伸ばされたように長い沈黙が横たわっていた。時間が流れしていく音が聞こえそうだった。

奈津子と藤巻は、目と目で会話して楽しそうだったが、僕と律子も居たたまれない雰囲気だった。久しぶりに律子と逢つたのだ。

エスタジオのあの一件以来、逢つことはもちろん、メールも電話も何一つ連絡が無かつたのだ。

僕は目を合わせるのも辛いくらいで、演奏会やコンクール以上にドキドキしていた。

だから、時々チラッと律子を見るのが精一杯だった。

律子も時々見ていたようだが、ほとんど下を向いていた。

まんじりともせず、四人がソファに座つていた。

お互に目を合わせることもなく、姿勢を変えずにジーツと座つていた。

奈津子と藤巻は一緒にうなずいたと同時に僕と律子を見た。そして同じ意味の言葉を吐いた。

「私達の話を聞いて」

「話を聞いてくれ」

僕と律子は、ソファに座り直した。

奈津子は微笑んでいた。

そして、藤巻も奈津子に笑い掛けていた。

「俺達は、恋人同士だつたんだ。だが、奴に引き裂かれたんだ」

藤巻がそう言つた。

「あの人策略に、私達は嵌められたの」

奈津子がこう付け加えた。

僕達は、驚きの表情で顔を見合わせた。

そして、僕はおずおずと訊いた。

「あの人つて？」

二人は同時に答えた。

「うちの人よ」

「健一だ」

藤巻はゆっくりと語つた。

「健一と俺は、同じピアノ科の学生だつた。よきライバルだつた」

奈津子が言つた。

「そして私はヴァイオリンの学生。私と要一さんは、高校から付き合つていたわ」

藤巻は溜息をつくよつと語つた。

「ま、奴の方が音楽以外のことは上だつたんだな。俺は、残念なことに音楽バカだつた。だから俺は、奴に言い包められて身を引いた」

奈津子が涙目で語つた。

「辛かつたわ。あの人言葉を信じてしまつたの。その後一年も経たないうちに、それが『策略』つてことに気付いたわ」

奈津子と藤巻は顔を見合わせた。そして、フフフとお互いに笑つた。

「私達のことはいいのよ。こんな地位になつたのもあのビートのお陰だし」

奈津子はそう言つた、藤巻はこう言つた。

「俺も、奴の後押しでヨーロッパに行つた。アメリカでも活躍できた」

奈津子は紅茶をすすり、藤巻はクッキーをかじつた。

「今度、私のリサイタルで、ピアノを……」

「君の伴奏をしたいな」

二人は、苦笑していた。そして、声を出して笑い始めた。

二人の和やかな会話に、僕と律子もくつろいだ。

だが、一人は僕と律子をキッと睨みつけたのだった。

「問題は、君達二人のことだ」

藤巻がそう言つと、奈津子は大きくうなづいた。

その時だった。

律子と奈津子、そして駿平と藤巻の四人が、応接室で現状と今後を和やかに語り合つていたその時、応接室の扉が突然、バン！と開け放たれた。

「私は許さん！ 絶対に許はしないぞ。絶対にだ！」

そこに立つっていたのは、雨宮健一だった。般若のような形相で、四人を睨んでいた。

「律子っ！ お前は頂点まで昇り詰めるんだ。その為に、私はどれだけ努力してきたことか！ お前はそれが解かっているのか！」

奈津子が何か言おうとしたのを健一は押し留めた。

「奈津子、君は黙つていなさい」

健一は律子に向き直り、優しく語りかけた。

「いいかい、これは『試練』なんだよ。乗り越えて会得しなきやならない『憂い』なんだ」

律子は、膝に置いた手を握り締め、ワナワナと打ち震えていた。

健一は、律子の様子を見てから、向き直つて藤巻を睨んだ。

「それにしても藤巻よ。貴様は何しに来たのだ！」

健一の声は打ち震えていた。

「私の邪魔をするとはどういうア見なのだ！ 貴様にチャンスをやつたのは誰だと思ってるんだ？！」

それから、健一は駿平の方に視線を変えた。

「それに、戸倉君。いい想いをさせてあげたのだがね！ それだけじゃ不満か？」

駿平は握り拳で立ち上がりとした所を、藤巻が首を振りながら腕で押された。

健一はもう一度、律子の方に視線を戻した。

「いいか、律子。私の後継という意識はあるのか？　日本で一番賞賛されるピアニストになれるんだぞ」

健一は懇願するように言った。

「私は、お前をそうさせたいのだ。解かってくれるな、律子」

律子はすっと顔を伏せたまま、震えていた。

健一はニヤリと笑つて、藤巻と駿平を見た。

「さあ、藤巻さん、それに戸倉君。お引取り願おうか」

藤巻は苦虫を潰したような顔で、駿平は握り拳が震えたままだった。

だが、どうする」とも出来なかつた。

その時だつた。

律子が突然、スクッと立ち上がつた。そして目を見開いて、父親の健一を睨み付けた。

「私、お父さんの人形じゃないわッ！」

健一はたじろいだ。

「おいおい、律子。何を言い出すかと思つたら……」

律子は更に健一を睨んだ。

「お父さんの音楽は、音楽じゃない！　だつて、だつて、全然楽し
くないわッ！」

健一は驚きで顔が強張つていた。

「私、駿平とライブハウスで演奏した時、楽しかつたわ。心が躍つ
たわ。初めてピアノを弾いていて楽しいと思つたわ。みんなの拍手、
優しい掛け声、とつても嬉しかつた……」

律子の頬に涙が一筋、流れた。

「楽しくない音楽なんか奏でたくないっ！　もう、お父さんなんか
に教えて欲しくないわッ！」

律子は急に頭を左右に振り始めた。

「もう嫌よ、イヤーーー！」

そう言つて、律子は応接室から飛び出して行つた。

奈津子は、追いすがるように律子の後を追つた。

健一は、呆けた顔で立ち去りしていった。

唖然としていた駿平の肩を叩いた藤巻は帰り支度を始めていた。

「帰るぞ。今日はレッスン日だったよな」

和やかに駿平を見詰める藤巻はそう言つた。駿平はうなずいてソ

フアを立ち上がつた。

藤巻は応接室を出る前に、雨宮健一の肩を叩いた。

「なあ、雨宮。いつもいつも自分の思い通りになる訳じゃあ、ないんだぜ」

健一は、いまだショックから抜けきれずに、膝から碎け落ちるようになじやがみ込んだ。

藤巻と駿平は、雨宮家を後にした。

窓から吹き込む、静かで優しい風が、レースのカーテンを揺らしていた。

同じ風が、律子の髪も揺らしていた。

律子は、自分の部屋のベッドの隅に座り、窓から外を眺めていた。外を眺める律子の目は当てもなくさ迷い、宙を見据えていた。部屋にドアをノックする音が響いたが、律子は微動だにしなかった。

鍵が掛かっていないドアが開いて、母親の奈津子が入ってきた。

「律子」

そう呼び掛けた奈津子の声にも律子は反応しなかった。

「律子、気分はどう?」

そう言って奈津子は、ベッドに座っている律子の横に座った。

「お父さん、ビックリしてたわ。……私もビックリしたけどね」優しく笑顔で語り掛ける奈津子に、律子は未だに微動だにしなかった。

「一度にいろいろなことが起こったわね」

奈津子は一度、律子の顔から視線を外した。

「お父さんの仕業なのは、薄々感じ取っていたわ」

奈津子は、改めて律子の顔を覗き込んだ。

「だけど、私と要一さんみたいにはなつて欲しくなかつたから」

律子は、母親の奈津子の顔を見た。

「私、私……」

律子はしゃくしゃくと上げそうになるのを抑えながら、搾り出すよつこ言つた。

その嗚咽のような言葉を聞いた奈津子は、そつと律子の右手に左手を重ねた。

「大丈夫よ。お父さん、分かってくれるわ」

律子の頬に涙が一筋、流れ落ちた。

奈津子はそつと律子の肩を抱きしめた。

「選ぶのは、あなたよ。律子の想つ今までいいのよ」
律子は母親の肩にうな垂れた。

雨宮家から帰り道、僕は師匠に話しかけた。

「師匠、今日は僕のレッスン日じゃないですよ」

師匠は前を見たまま、答えた。

「いや、今日はレッスン日だ」

師匠は立ち止まって僕を見た。

「お前の、最後のレッスンだ」

言い終わると、師匠はまた歩き出した。

ロフトのレッスン室に着くと、藤巻は鍵を開けた。

見慣れた、ピアノが置かれたレッスン室だ。

僕がピアノのカバーを外そうとした時、師匠は僕に声を掛けた。

「今日、ピアノは弾かない。そこ」のソファに座つてい「ひ

僕は「え？」と思つた。

レッスンなのにピアノを弾かないなんて有り得ないことのようこ
思つた。

師匠は、コーヒーメーカーのスイッチを入れてドリップさせ始めた。
そして、マグカップになみなみと注いだコーヒーを僕の前に置いた。

師匠は、「コーヒーをすすりながら僕にこう言つた。

「もう、お前は卒業だ。俺の所から巣立つ時が来たんだよ」

僕は、すすつたコーヒーを噴出しそうだつた。

「え？ 卒業つて？ どうこうことなんですか？」

師匠は、「コーヒーをゴクリと一口飲んでから言つた。

「阿川真理に会つたよ」

師匠の言葉に、僕はビックリした。

「真理さんに会つたんですか？」

師匠は「フフフ」と笑いながら言った。

「阿川にはレッスンしたことがある。彼女は立派に成長した」

師匠は再び、マグカップのコーヒーをすすつた。

「彼女に付いて行つても悪くないぞ。いい機会だ。修行してこい」
僕はちょっと嬉しくなつた。師匠に認められたこともそつだが、
真理や桜沢と仕事が出来ることに嬉々とした。

だが、それを察知して師匠は言つた。

「それでお前、律子さんのことはどうなんだ？」

師匠の言葉で、忘れていた大切なことを思い出し、僕は少し下を
向いて答えた。

「あ、はい。それなんですけど……」

藤巻は腕を抱えて唸つた。

「うーむ、難しいことだな。俺の時と同じだな」

師匠は立ち上がり、宙を見ながら言つた。

「お前達には、将来がある。だが、それを決めるのはお前達だ」

師匠は腕組みをした。

「俺でもない、雨宮でもない、阿川でもない。……解かつてゐな」

僕は、コクリとうなずいた。

「だがな、雨宮健一は簡単な奴じやない。たぶん、律子さんはお前
とは一緒に行けないだろう。それそれで頑張れるのか？」

そう言つて師匠は僕に向き直つた。

僕は、師匠を食い入るように見つめた。

律子は、大通りにあるオープンカフェで待ち合わせをしていた。
グレーのショートジャケットにオフホワイトのタートルネックセ
ーター、黒のプリーツスカートにベージュのウエッジパンプスとい
う、律子にしてはちょっと大人びた格好だつた。

そこへ、息を切らしながら近づいてきた女人人がいた。セミロン
グの栗色の髪、白のスキッパー・シャツの上に黒系のレイヤードニッ

ト、カーキグリーンのカプリパンツにバックルベルト、スエード調パンプスの装いで現れたのは、阿川真理だった。

「『めんなさい』

真理は、抱えていた衣装バッグを隣の席において、律子の前に座つた。

「呼び出しておいて、遅れるなんて」

田代とく近づいてきたエイトレスに、真理はエスプレッソを注文した。

「ホント、『めんなさい』。打ち合わせが長引いたやつで」

真理は、律子に頭を下げた。律子は首を横に振つて応えた。

「いいえ、まだ10分くらいですから」

律儀に答える律子に、真理は微笑み返した。

「ふーん、そつか。駿平はもつと待たせるんだ」

そう言われて、律子は赤くなつて顔に手を当てた。

「いえ、そ、そんなことはないです」

真理は、律子に更に深い微笑を返した。だが、すぐに真顔に戻つた。

「もう一度、あなたに謝らなくちゃね。ホントに『めんなさい』」

真理は膝に手を置いて頭を下げた。律子は、恐縮して肩が吊り上がつた。

「そんなこと、ありません。私も誤解してたから……」

真理は顔を上げて、ニッと笑つた。

「途中までは本気だったのよ、今でも、駿平に恋しているわ」

真理にそう言われて、律子はドキッとした表情を見せたと同時に、ムツとした表情も見せた。

真理は律子の表情に構わず話し続けた。

「もつとも、今は『駿平の音楽に』だけだね」

律子は、ちょっとホツとして溜息をついた。

「横恋慕は、音楽だけよ」

真理は、ウエイトレスの持つてきたエスプレッソに口を付けた。

一口飲んでから、真理は話を続けた。

「それでね、駿平を貸して欲しいの」

律子には何のことだか、戸惑いの表情を見せた。

「彼の音楽に、私は惚れたの。彼を育ててみたいのよ

律子は、真理からの思い掛けない言葉に戸惑った。

「それって、どういうことですか？」

律子は、話が分からないことを真理に伝えた。

「彼をアメリカに連れて行つて、あなたに恥ずかしくないミュージシャンにしてみせるわ」

律子は、更に昏迷を深めた。そして、正直な気持ちを口にした。

「分からぬわ、突然にそんなことを言われても……」

律子の顔を見つめていた真理は視線を外して、冷めかけたエスプレッソを飲み干した。

「そうよね。急に言われても困るわよね

そして、真理は何かを思いついたようにテーブルに肘を付いて、律子に迫った。

「それとも、あなたも駿平と一緒に来る？」

一十八、律子と駿平

僕は、何度かためらつた。

だが、どうしても必要なことなんだと言い聞かせて電話をした。
電話を掛けた先は、律子の携帯電話だった。

「プルルルルル、プルルルルル、……」

呼び出しコード音が耳の中に繰り返される。いつ律子が電話に出るのだろうか、ヤキモキしながら呼び出しコード音を聞き続けさせられている。律子につながるだろうか。

突然、呼び出しコード音が途切れた。つながるまでの時間が以上に長く感じられた。

「……はい」

か細い声で、様子を探るかのような、律子の声だった。僕はその声を聞いて、背筋が伸びたような感じがした。

「しゅ、駿平です。あ、あの……」

それでも僕はシドロモドロだった。何をどういえば言いか、何も思い付かなかつたし、何も考えられなかつた。律子に電話したのはいいけれど、言葉が全然出てこなかつた。

僕がアタフタしていると、律子の声が聞こえた。

「駿平」

それは、律子の小さな声だった。辛うじて聞き取れた声だった。
だが、僕はその声で我に返つた。

「なに？」

僕は、いつもの感じで反応してしまつた。

「……」

だが、律子の反応も定まらなかつたらしく、無言のままだつた。
僕は、何も考えないままに言葉が口から出た。

「逢いたいんだけど、ダメかな？」

しばらく時間が流れた。

律子は辛うじて、聞こえる声で返事をした。

「うん、私も逢いたい」

僕は、ライブハウスのカウンターで、いつも通りにコーラを飲んでいた。

「駿平、今日は弾いてくれないのか」

マスターはいつも通り、僕に声を掛けてくれた。

「上手くいったらね」

僕がそう言うと、マスターは怪訝な顔をした。

「律子ちゃんか」

マスターがそう言いつと、僕は苦笑いをした。

マスターはその意味を悟つたらしく、こう答えた。

「じゃあ、あとで頼むぞ」

僕は手を振つて答えた。

マスターはうなずいて、店の入り口の方を見た。すると、女の子が一人、店に入つてきた。それを見てマスターは声を掛けた。

「律子ちゃん、こつち、こつち」

マスターは、律子を手招きした。

水色のチェック柄のスカートに白のブラウスに紺のスカーフ、ベージュのカーディガンの律子は、初めて一人で店に入つてきて、オドオドしながら店を見回していた。

マスターの声に気が付いて、律子は軽く微笑んで、小走りにカウンターにやつってきた。

マスターは満面の笑みで、律子にこう言った。

「律子ちゃん、いらっしゃい。よく一人で来れたね。立派、立派」

律子はちょっとむくれた。

「やだー、マスター！ 私、子どもじゃないわよ」

律子はマスターに文句を言った。

「冗談だよ、冗談」

そう言ってマスターはカウンターの中に入った。

律子は、僕の横に座つた。いつも通り、何気なく、それこそいつもの「癖」のようだ。

これはマスターが場を和ませてくれたからだらう。

僕は、律子に声を掛けた。

「元気だつた?」

律子はビクッとして僕を見た後コーラのグラスを見つめながら、うなずいた。

思ったよりもはしゃいでいる律子に、僕は正直なところ、驚いていた。

「うん、元気よ」

僕は、コーラを一口呑んだ。

「そう、良かった」

律子は、グラスを見つめたまま、おずおずと、でもハキハキと喋つた。

「ごめんな。私、誤解してたのね」

僕は、律子の言葉に慌てて言い返した。

「僕の方こそ、誤解されるようなマネをして」

律子は僕の方を見た。その顔は満ち足りた顔だった。

「もういいのよ。みんな、父の仕業なんだから。謝らなくてもいいわ」

そう言って、律子は満面の笑みを僕に見せてくれた。

「ねえ、マスター」

律子は、カウンター越しにマスターを呼んだ。マスターはにこやかに話し掛けた。

「なんだい、律子ちゃん?」

律子は田配せしながら、マスターにささやいた。

「今日の二杯目は、コーラじゃなくて『アフィニティ』っていうカクテルにしてください」

マスターは、ちょっとビックリした。

「カクテルとは。律子ちゃん、大丈夫かい？」

律子は二口二口しながら言った。

「大丈夫よ。駿平の分もお願ひね」

マスターはグッジョブサインを出して応えた。

「OK。しばらくお待ちを」

律子は僕を見て、フフフと笑った。

「律子、どうしたんだい？」

僕は、律子の行動に驚いて、つい言葉にした。

「うん、だつて今日は気分がいいの。だつて、大好きな駿平に逢えたんだもの」

そう言つて律子は、僕の腕にしがみついてきた。僕は、少し恥ずかしくなつた。

「おいおい、なんか照れ臭いよ」

それでも、律子は僕にしな垂れてきた。

「いいの」

そこへ、マスターが律子が注文したカクテルを持ってきた。僕と律子の前にカクテルグラスを置いた。

カクテルグラスには、深い琥珀色を湛えた『アフィニティ』が満たされていた。

「律子ちゃん、意味深だね。『親近感』を意味するカクテルを注文するなんて」

マスターにそう言われて、律子は頬を赤く染めた。

「分かつちやつた？」

マスターはニヤリと笑つて、カウンターの奥に消えていった。

「乾杯ね」

僕と律子は、グラスを持つてグラスを打ち鳴らした。

少しだけ飲み干した後、僕は律子に静かに話し出した。

「僕は、真理さんとアメリカに行こうと思つて。師匠からはお許しが出た」

律子は、僕の話を黙つて聞いてうなずいた。

「律子はどう思う？」

律子は唇を一文字にして言った。

「うん。……お父さんから真理さんのことは聞いたわ。それにアメリカ行きの話は真理さんから聞いたわ」

「僕は、もう一口、カクテルを飲んだ。

「一緒に行くことも出来るんだけど？」

律子は、グラスを両手で持ったまま、首を横に振った。

「やっぱり、そんな訳にはいかないわ」

律子の言葉を聞いて、僕は視線を落とした。

「お父さん、か」

律子は「ククリとうなずいて、急に元気な声で話し始めた。

「それにね、私も頑張りたいのよ、ピアノで」

僕は、律子を覗き込んだ。最初にデートした時の強張った硬い笑

顔だけ、ハキハキとして落ち着いた声で、律子は話を続けた。

「だつて、駿平がアメリカで頑張るつて言つんだもん、私だつて日本で頑張らなきやつて思つたの。場所が違つたつて、それつて出来ることよね？」

律子が僕を覗き込むように言った。僕はためらいながらも言葉を出した。

「それはそなんだけどさ」

曖昧な僕の返事に律子はちょっと声のトーンを下げた。

「いつでも好きな時に逢えないのは、ちょっとツライかもね。えへ

へ

言い終わると、律子はカクテルを一気に空けた。

「おいおい、無理するなつて」

僕は、律子をなだめた。

「大丈夫よ、これくらい

律子は胸を叩いて誇示した。その姿に僕は思わず、クスクスと笑つてしまつた。

「な、何が可笑しいのよっ！」

律子が言えれば言つほど、僕は笑いがこみ上げてきた。

「もう、知らないつ！」

律子は、ブイと横を向いてしまった。

僕は笑うのを止め、律子の両肩をつかんで僕の方へ強引に向きを変えた。

「分かつたよ。十分すぎるほど分かつたよ、律子の気持ちが」
律子は肩を抱きすぐめられてビックリして身体に力が入つていた
が、僕の言葉を聞いてその力が抜けていくのが分かつた。

「時々、戻つてくるよ。律子のために」

僕がそう言つと、律子の頬に涙が一筋流れた。

そして律子は静かに目を閉じた。

僕は、ゆっくりと律子に近づいていった。

そして、お互いの唇が触れ合つた。

とても、とても長い一瞬だった。

僕は、ゆっくりと顔を離して、静かに目を開けた。

律子の頬が赤く染まっていた。

律子がゆっくりと目を開けた時に、僕はもう一度訊き直した。

「律子は大丈夫？ 僕は……」

僕が心配そうに言つと、律子はアッケラカンと言つた。

「時々、戻つてきて。私のこともちゃんと見てね」

僕はうなづきながら、律子をハグした。

「おほん、おほん」

ワザとらしい咳払いをして、マスターが現れた。

「そろそろさー、弾いてくれないかなー、駿平」

僕がうなずく前に、律子が言つた。

「マスター、今日は私と駿平で連弾するわ。いいでしょ？」

マスターは、拍手をして喜んだ。

「それはブラボーな提案だね。よろしく頼むよ、律子ちゃん」

律子は僕の手を引いて、ステージに向つた。

一十九、その後

何日かが過ぎた後、僕は律子と母親の奈津子と共に、師匠のレスン室を訪ねていた。

「あの人、遂に折れましたわ。『律子の好きにしなさい』って、奈津子は、満面の笑みで藤巻に語り掛けていた。

「でも、さすがに海外へ行くことまでは無理でしたわ」

奈津子は少し残念そうだったが、藤巻は相変わらず微笑んでいた。
「雨宮の性格から言って、それは固持するだろうな。それにヤツの立場も微妙になるだろ？」

藤巻は、律子の方を向いて尋ねた。

「それで律子さん、どうするつもりなんだ？ 僕が力になれることがあれば言つてくれ」

藤巻からの言葉に、律子は晴れやかな顔で藤巻にこいつ告げた。

「私、師匠さんに教わりたいんです。駿平がどんな風に習つたのか、知りたくて……」

そう言つと、律子は赤くなつてうつむいた。

藤巻は頭をかきむしめた。

「力になるとは言つたが、そいつはなー」

藤巻は引きつりながら奈津子に言つた。

「雨宮の奴、俺では首を縊に振らんだろう」

奈津子は横目で律子を見ながら、未だに笑みが絶えなかつた。

「あの人もいろいろと条件を出してきましたわ。ところが、要はなんなら〇〇をくれましたの」

奈津子はこれまでに見たことも無い笑顔でこいつ言つた。

「是非、『ご教授をお願いします』

藤巻は頭をボリボリと搔きながら驚いていた。

「ふーん、あの雨宮がね。娘にや弱いんだな、やつぱり」

師匠は僕のほうを向いて、鋭く言つた。

「ところで、駿平！ 律子さんとはどうするんだ？」

僕は師匠に向き直つて姿勢を正した。

「僕は、真理さんとアメリカに行きます。そして、研鑽を積んできます。その間、律子は師匠に鍛えてもらいます」

律子は「クリとつなづいて言つた。

「そして、いつか一緒に演奏します。それが、今の私達の目標なんです」

師匠は腋の下をポリポリと搔きながら言つた。

「逢わなくて大丈夫か？ 頑張れるのか？ ……音楽の方じやないぞ！ 一人のことだ！」

僕は律子を見た、律子も僕を見た。

そして師匠に言つた。

「大丈夫です。頻繁に日本へ帰ってきますから」

師匠は僕の額にデコピンをした。

「バカヤロー！」

そう言つて師匠は「はつはは」と馬鹿笑いした。

僕も、律子も、奈津子も同時に笑い始めた。

僕は阿川真理からの電話で呼び出された。

あの、Nスタジオの一階の三番スタジオに。

スタジオの重々しい扉を開けてコントロールルームに入ると、そこには阿川真理と彼女のマネージャー、そして師匠である藤巻要一も居た。

「ハンコ、持つてきたか？」

師匠は、ぶつきら棒な言い方で僕を迎え入れた。真理はフフフと笑つて、師匠をいなした。

「先生、サインでもいいんですから」

師匠は分かつていていう表情を見せて苦笑いした。真理は、突つ立てている僕をソファに座るよう促した。

「戸倉君、この世界は契約社会だから、契約してもらわないといけ

ないの」

僕はうなずいた。真理は続けて説明した。

「簡単に説明するけど、君は勉強しながら、私達と活躍してもいいうことになるわ」

真理は微笑みながら、僕を見つめていた。

「ピアノは私に師事、トランペットは桜沢に師事、というカタチね」
真理は簡単なスケジュール表を見せてくれた。僕はその表を覗き込んだ。

「それで、これが年間のステージ回数。大きなホールから小さなラ
イブハウスまで百八十回程度。結構キツイわよ」

真理は僕に微笑みかけた。僕は少しビビっていた。

「僕で大丈夫でしょうか？」

真理は、僕の肩を叩いた。

「何を言つてるの！ 私と桜沢が見込んだのよ。やれるわよ。私が
立派に育てて見せるわ」

僕は精一杯の笑い顔を真理に見せた。

「大丈夫よ。君なら必ずやれるわよ」

真理にそう言われて、僕は照れて耳まで赤くなつた。

「まだまだ、くちばしの黄色い雛だがな」

師匠は、僕に対する嫌味を忘れていなかつた。でも、それは本当のことだつた。

「いよいよ、これで駿平もミュージシャンよ」

そう言つて真理は僕に微笑んだ。師匠が拍手をして僕を祝福してくれた。

そこへマネージャーが割り込んできた。

「さあ、駿平くん。君の記念すべき第一歩を記してくれたまえ。そ
の前に、契約書の確認を」

マネージャーは、僕に契約書を読み上げ始めた。

「その前に、一つだけ……」

僕がそう言つと、マネージャーは優しい微笑を湛えて言った。

「大丈夫だよ。君の望んだ『一ヶ月に一回の帰国』の条項は入ってるよ」

僕は、赤くなりながらホツとした。

その様子を見て、真理が言った。

「シッカリやらないと、私が帰国許可を出さないかもよ」

僕はビックリして真理の方を見た。

「脅かさないでくださいよ」

真理は大声で笑い、師匠の藤巻は失笑していた。

三十一、旅立ち

大きなステッケースを持つ人々が行き交い、遠く離れたイミグレーションの奥にある「デューティーフリーショップ」からの香水の匂いが、空港会社の手続きカウンターまで匂っていた。

ここは、某国際空港の搭乗口。

「アテンション、ブリーズ。航空二三七便・ニューヨーク行きに搭乗予定のお客様、南ウイング八番ゲートにて搭乗手続き中でございます……」

飛行機の出発を告げるエコーの効いたアナウンスが、広大なロビーに響いていた。

手荷物だけになつて身軽になつた僕は、少し離れて待つていた律子のところへ駆け寄つた。

「出発まで一時間もあるから、ラウンジに行こうよ」

僕がそう言うと、律子は微妙なニュアンスの言葉を返してきた。

「あと一時間しかないのね、一緒に居られる時間は……」

僕は、律子の言い方に少し切なくなつた。

「そんな言い方、しないでくれよ」

僕は無理やり笑いながら、精一杯の皮肉を言つた。

「これが永遠の別れつて訳じゃないんだからさ、すぐに戻つてくるからさ」

律子は下を向いて、涙を拭つてから僕を見た。

「そう、そうよね。私つてダメね」

そう言って、律子は精一杯の笑顔を僕に見せてくれた。律子の目は、もう既に真つ赤になつっていた。

「じゃ、行つてくるね」

僕は、律子と握手をした。律子は、僕の顔を見つめてうなずいた。

「いつてらつしゃい。気を付けてね」

そこへ阿川真理が僕の背中をグイッと押した。

「そこのお熱い、お一人さん。ギューッと抱き合つたつていのよ

」

僕と律子は真っ赤になつていた。その姿を見て、真理が呟いた。

「……はあ、羨ましいわあ」

真理と駿平は、イミグレー・ショーンに消えて行つた。

駿平は時々振り返つて、大きく手を振つていた。

律子も、それに合わせて手を振つていた。

一人の姿が見えなくなつた頃に、低い声が聞こえた。

「これからが大変だな」

振り返ると、そこに雨宮健一が立つていた。

律子と奈津子、そして藤巻も驚いていた。

「律子、戸倉君に負けないようこ

律子はちょっとムツとした。また、健一の台詞が始まつたと思つた。

「でないと、彼とはセッショーン出来ないぞ。戸倉君は、凄い進化をするかもれない」

健一は、少しばにかんだ。

「楽しみだな」

健一は律子の方を向いて、にこやかに笑つていた。

「律子、負けちゃダメだぞ」

律子はそれを聞いて微笑んだ。

「うん」

律子は、うなずいて駿平が消えて行つた方向をずーっと眺めていた。

そんな律子の姿を、健一は穏やかな表情でジーッと見ていた。
まるで勝ち誇つたよつに。

三十一、旅立ち（後書き）

完結しました。

感想など、お寄せいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4078f/>

Only the piano : her friend.

2010年10月8日14時39分発行